

昭和61年度

塚穴1号・2号古墳

— 昭和61年度特殊改良第一種事業一般県道手塚原米川飯田線
飯田市中宮敷地区内における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

長野県飯田市教育委員会

長野県飯田建設事務所

昭和61年度

塚穴1号・2号古墳

— 昭和61年度特殊改良第一種事業一般県道手塚原米川飯田線
飯田市中宮敷地区内における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

長野県飯田市教育委員会

長野県飯田建設事務所

序

飯田市上久堅地区は、飯田市史跡神之峯城跡の存在が示すように中世末期においては、一帯を治めた知久氏の居点となった場所である。また、近世においては信州より遠州への主要道である秋葉街道筋として、特に小川路峠の麓として繁栄をみた。

しかし、近年の社会情勢の変化に伴い、応時の繁栄を失い、また山間部という自然条件下にあって、飯田市街地から直線距離で5 km余であるにもかかわらず、諸開発等は遅れがちな状況のある地区となっている。特に道路状況はその整備が遅れ、早急に道路改修等を実施する要があった。

そうした中、地区内における主要幹線道路である一般県道手塚原米川飯田線の改修が徐々に進行し、それに関連して地区を代表する文化財のひとつである塚穴古墳の一部をやむなく破壊せざるを得なくなった。そのため、工事実施に先立ち飯田市教育委員会が発掘調査を実施した。

調査の結果は、本文中に示した通りですが、本調査の結果が地域の歴史研究及び全国的視野での古墳文化研究に多大な資料提供するものであると信ずる所であります。なお、調査後の石室そのものが関係者のご努力により現地に保存されたことは、生の歴史資料、さらには教育現場の教材として活用されるもので望外の喜びです。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査及びその整理作業さらに2つの石室そのものを現地に保存できるよう一部設計変更までしてのご協力と深いご理解をいただいた長野県飯田建設事務所をはじめとする工事関係者、並びに地元関係者のご尽力に感謝いたすとともに、上久堅村誌編纂委員会をはじめとする調査に直接関係された各位の労をねぎらい序といたします。

昭和62年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島

稔

例 言

1. 本報告書は一般県道手塚原米川飯田線改修工事に伴う塚穴1号・2号古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会が長野県飯田建設事務所より委託を受け実施したものである。
3. 発掘調査は昭和61年10月に実施し、その後引き続き61年度において整理作業を実施した。
4. 本報告書は清水与智光・岡田正彦・佐合英治・吉川豊・小林正春が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお、遺物及び図面等の整理について、執筆者の他に、佐々木嘉和・桜井弘人・山下誠一・池田幸子・吉川紀美子・小平不二子・木下恒子が補佐した。
5. 本報告書の編集は佐合・小林が行ない、小林が総括した。
6. 本報告書に関連した遺物及び図面類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館で保管している。

目 次

序	
例言	
I 経過	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
1) 1号古墳の調査	1
2) 2号古墳の調査	2
3 調査組織	3
1) 調査団	3
(1) 調査員	3
(2) 作業員	3
2) 事務局	3
3) 指導・協力	3
II 立地と環境	4
1 自然的環境	4
2 上久堅の考古学的調査	4
3 歴史的環境	7
III 調査の結果	12
1 塚穴1号古墳	12
1) 内部主体	12
(1) 側壁	12
(2) 奥壁	12
(3) 天井石	12
(4) 底面	14
(5) 閉塞石	14
(6) 石室形態	14
2) 前庭部	14
3) 墳丘	15
(1) 墳丘	15
(2) 葺石	15
(3) 周溝	15

(4) 土層	16
4) その他	18
(1) 石室内中世遺構	18
(2) 縄文時代遺物包含層	18
5) 遺物	18
(1) 土師器	18
(2) 須恵器	18
(3) 金属器	21
(4) 石製品	22
(5) 中世土器	22
2 塚穴2号古墳	25
1) 内部主体	25
(1) 側壁	25
(2) 奥壁	25
(3) 底面	25
2) 遺物	25
(1) 土師器	25
(2) 須恵器	27
(3) 金属器	27
3 縄文時代遺物包含層	27
1) 早期	27
2) 中期末～後期	27
まとめ	29

挿 図 目 次

第1図 塚穴1号・2号古墳周辺遺跡図	5
第2図 飯田市上久堅地区遺跡分布図	8
第3図 塚穴1号・2号古墳石室位置図	11
第4図 塚穴1号古墳石室	13
第5図 塚穴1号・2号古墳土層	17
第6図 塚穴1号・2号古墳出土土器	20
第7図 塚穴1号・2号古墳出土金属器・石製品	21
第8図 塚穴1号古墳出土中世土器	23

第9図	塚穴2号古墳石室	26
第10図	縄文時代遺物	28

表 目 次

第1表	飯田市上久堅地区遺跡一覧	9
-----	--------------	---

図 版 目 次

図版1—1	塚穴1号古墳近景
1—2	“ 調査前の状況
2—1	“ 石室内部
3—1	“ 石室左側壁
3—2	“ 石室右側壁
3—3	“ 石室入口部
4—1・2	“ 石室底面石敷
5—1	“ 前庭部遺物出土状況
5—2	“ 前庭部全景
6—1・2	“ 外護石積及び墳丘
7—1	“ 外護石積及び墳丘
7—2	“ 入口部外護石積
8—1・2	“ 外護石積
9—1	“ 墳丘及び西側周溝
9—2	“ 西側周溝
10—1	“ 東側墳丘断面
10—2	“ 東側墳丘裾部
10—3	“ 墳丘下部土層状況
11—1～3	“ 遺物出土状況
12—1	塚穴1号及び2号古墳
12—2	塚穴2号古墳石室内埋土堆積状況
13—1	“ 石室全景
13—2	“ 奥壁
14—1	“ 左側壁
14—2	“ 右側壁

- 15-1~8 塚穴1号古墳出土遺物
- 16-1~8 塚穴1号古墳出土遺物
- 17-1~6 塚穴1号・2号古墳出土遺物
- 18-1~8 塚穴1号古墳出土中近世遺物
- 19-1~8 塚穴1号古墳出土中近世遺物
- 20-1~3 発掘調査風景
- 21-1~3 発掘調査風景
- 22-1~3 発掘調査風景

I 経 過

1 調査に至るまで

昭和58年2月に飯田建設事務所より飯田市教育委員会宛に、一般県道手塚原米川飯田線の道路改良計画に関連して、埋蔵文化財包蔵地の保護協議依頼があった。

この県道が通過する飯田市上久堅地区は飯田市街地より約13km離れた天竜川東岸標高600mを越える山間部にあり、飯田市街地をはじめとする近隣への交通手段は車を抜いては考えられない地理的条件下にあるといえる。そうした中で円滑な交通路の確保は地域住民の切なる願いでありその整備は行政上にも不可欠な要件となっていた。そうした中昭和40年代後半から、地域住民をはじめ各方面から具体的な基幹道路の整備に関する要望が出されはじめ、中でも地区内から隣接する喬木村富田地区を経て飯田市街地へ至る一般県道手塚原米川飯田線の改良事業実施は上久堅地区はもちろん飯田市にとっても懸案事業であり、その改良は徐々に具体化されるに至った。

建設事務所より示された計画図面によれば、既存道路を主体に改良工事を行ない、上久堅地区内において数少ない古墳の一つである塚穴古墳の前面を通過しているが、古墳そのものには影響を及ぼさないことで発掘調査等の必要はないと判断した。

しかし、その後具体的な計画が示される中で、施工上石室及び墳丘と考えられる箇所の一部を削り取らざるを得ないとのことで、飯田建設事務所から飯田市教育委員会へその保護について再度協議があり、事前に発掘調査をして記録保存を計ることとなった。

2 調査の経過

1) 1号古墳の調査

調査前の本古墳は、道路面より1.5m程の所に草に覆われて、石室の天井石が一部露出していた。墳頂部は桑畑と東側にある墓地のため、天井石より60cm程の高さの所で、平滑にされている。石室は、丘陵の平坦面となる部分を掘り抜いたような状態に見うけられ、現道路改修の際、前面を比較的大きく削り取られているものと考えられた。また、調査前の石室高は、入口部で1m、奥壁部で1.6mを測り、かなりの土砂が堆積しているものと予想され、全体的には石室の残存状況は良好と判断された。

現地での作業は既設道路を主体とする道路改修工事のため、アスファルト舗装部を重機により排除して後の発掘調査となった。

10月1日に作業着手し、石室周囲に繁茂した雑木・雑草等の排除及び表面の崩落土を取り除き、石室の残存状況を把握した。

また、現道路下にかかって側壁下段の石が残存していることも認められ石室平面形はある程度元の姿で把握されることも予測された。

石室内部は前述のとおり多量の土砂堆積があり、順次掘り進めた訳であるが、全体的に礫の混入が多く作業進行に手間取った。

なお、里人の言によれば、道づくり・井ざらいの際石室内に随時代大小の礫を投げ入れたとされ大半が近年の人為的堆積であったといえる。

天井石より2.4～2.5mの間に礫を若干含むが、焼土と炭で面を構成する層が検出された。この層は出土遺物から、中世になんらかの人為的要素が加えられ形成されたものと思われる。

石室底面の敷石は、ほとんど原位置をとどめておらず、ある時期に敷石まで抜き取っての盗掘があったと思われる。

10月8日までに、本古墳に属すると考えられる須恵器・金属器等の遺物・中世と考えられる内耳鍋等を出土し、石室の全器・葺石等を検出して発掘作業をほぼ終了した。

10月11日から、石室及び土層断面について写真測量を行ない10月12日に全作業完了となった。

その後、調査後の本古墳の取扱いについて、飯田建設事務所、飯田市教育委員会及び地元上久堅自治会との間で協議し、石室については極力原形を保つように設計変更し、改修後の道路敷となる部分以外は今後の崩落等破損の防止策を講じた上で保存することとなった。

また、南側に検出された葺石部についても、凍上等による崩落防止策を講じて現状保存することとなった。

2) 2号古墳の調査

1号古墳調査終了後10月17日に施工業者より前面の削取予定地の工事実施する旨の連絡があり、教育委員会担当者が現地にて立ち会う。その折塚穴古墳から北へ20m程道路沿いに離れた同様の丘陵斜面に、黒色土の落ち込みと古墳石室側壁状の石積みの存在が認められ、同様の立地形態を示す古墳が更に一基存在すると推測され、工事を一時中断して急ぎ17日午後から現地調査し、内部の黒色土を掘り進める中で横穴式石室であることが判明した。本古墳の名称については、以前から知られていたものを塚穴1号古墳、新発見のものを塚穴2号古墳とする。

古墳と断定した段階で、1号墳の状況等から丘陵内部にかなりの石室本体が残存し、かつ今までその存在すら知られなかったことから未盗掘墳ではと期待がかけられた。

石室内部は、漆黒色土中に石室用機と考えられる石・礫がビッシリと入り込んだ状態であった。

調査は、内部の石・礫を除去する作業が主体となり、それを除去した段階で天井石は全く残存せず、石室も大半が削取され奥壁寄りがわずかに残ったのみであることが判明し、18日に発掘作業を終え、19日に石室の測量作業を行ない全作業を完了した。

なお、2号墳の取扱いについては、1号墳同様関係者協議の結果崩落防止策を講じた上で保存することとなった。

3 調査組織

1) 調査団

(1) 調査員

岡田正彦 清水与智光 小林正春 桜井弘人 佐合英治 山下誠一 吉川豊

(2) 作業員

大島利男 松下真幸 若林太吉 木下伝 岡島定治 深尾由香 池田幸子
小平不二子 吉川紀美子 木下恒子

2) 事務局

事務局長	塩沢 正司	飯田市教育委員会社会教育課長
	池田 明人	” 社会教育課文化係長
	小林 正春	” 社会教育課文化係
	吉川 豊	” 社会教育課文化係
	土屋 敏美	” 庶務課

3) 指導・協力

長野県教育委員会文化課 飯田市上久堅自治協議会 上久堅村誌編纂委員会 (内山組)

(小林正春)

II 立地と環境

1 自然的環境

飯田市上久堅は天竜川の東、伊那山脈の西麓に位置し、天竜川の形成した上位段丘面で準平原地形の丘陵（標高650～900m）をつくり、その上に「伊那層」をのせている。その丘陵面を玉川・細田川・卯月川等の小河川が浸蝕して、竜東山地の独特な地形をつくっている。

塚穴古墳は飯田市上久堅小字塚穴地籍にあり、通称こ観音さまと言われる台地の東南崖下に立地する。この台地の地質は花崗岩の基盤の上に「伊那層」がのっており、東南は玉川の浸蝕によりけずられて急傾斜となっている。北西側は柏原川の氾濫により、ややゆるやかに傾斜している残塁地形の台地である。古墳の上部は台地の崖錐で、地質はロームの変化した黒色土壌で礫を含んでおり、現在の地目は畑地である。前面は現玉川の河床より約10m程の比高があり、古墳を切って県道手塚原一米川飯田線が通っている。古墳の下や前方は玉川の氾濫した平坦なところで水田化され、上久堅としては割合にまとまった水田地帯を形成し、原始・古代の遺物も出土しており、早くから人々の定住した場所と考えられる。

次に当地の気象状況について『下伊那誌気象編』でみると、昭和28～40年の平均気温が12.5° Cで、最寒月の1月の平均気温が0.7° C、最暖月の8月の平均気温は24.0° Cとなっており、飯田と比べて平均気温で0.7° Cと低く、標高差によるものと思われる。また、上久堅中学校の資料によると、年降水量は1666mmとなっており、最高月は6月の280mm、最低月は12月で56mmである。これをみると郡全体の中では、降水量は少なく、乾燥地域に属している。風向は季節や微地形により異なるも、四季を通じて西寄りの風が強く、また日照時間もいろいろの条件により地域差はあるが比較的長い地域である。

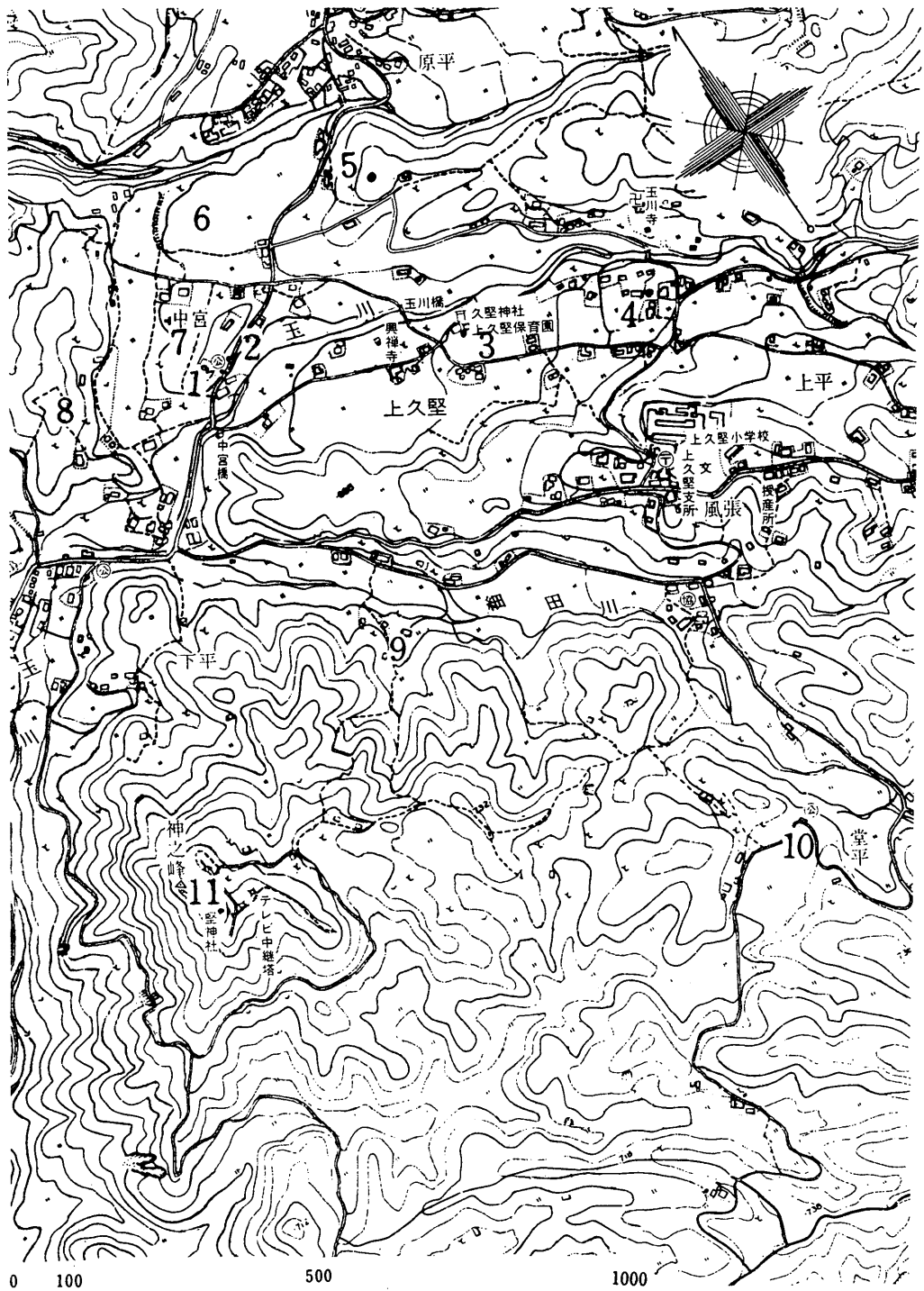
以上のように自然環境上からみて、当地域は人類の居住に適した場所であったと言えよう。

（清水与智光）

2 上久堅の考古学的調査

飯田市上久堅の考古学的調査の黎明は、大正時代末年である。大正10～11年にかけて、下伊那教育会は郡下の考古学的調査を実施するに当たり、市村威人氏を事実上の責任者とし、上久堅地区には小学校教諭の折山守国氏を調査委員とした。その成果は、大正13年刊行の鳥居龍蔵著『下伊那の先史及原史時代図版』に詳しい。それには上久堅の遺跡及び古墳として12カ所が記載されたほか、中宮遺跡（現在の上平遺跡）の遠景写真と北ノ入遺跡及び鬼釜古墳出土の遺物写真と実測図が掲載されている。ちなみに遺跡名称を列挙すると、下平・神之峰・中宮・上平・堂平・北ノ入・総三坂・小野子・落倉遺跡と塚穴・鬼釜・杵禪古墳である。

戦後になると、昭和27年、市村威人・大沢和夫両氏を中心に、『下伊那史第二・三巻』の資料収集のた



第1図 塚穴第1号・2号古墳周辺遺跡図

- | | | | |
|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 塚穴第1号古墳 | 2. 塚穴第2号古墳 | 3. 宮ノ原古墳 | 4. 上宮原古墳 |
| 5. 明賀塚 | 6. 北田遺跡 | 7. 中宮原遺跡 | 8. 下平遺跡 |
| 9. 十二間遺跡 | 10. 堂平遺跡 | 11. 神之峯城跡 | |

め郡下の古墳を歩き、当地区にも来訪して3基の古墳を確認した。それは昭和30年刊行の市村威人編『下伊那史第三巻歴史時代下』に掲載されている。翌年、『信濃史料第一巻上・下』が刊行され、新たに卯月山・蛇沢遺跡が加わり11遺跡3古墳の名称が記載された。昭和35年頃から中宮の田中英伍氏は、自宅周辺の下平遺跡の北端にあたる畑から、縄文時代中期に想定される石鏃12点を表採所蔵していたが、これを岡田が昭和39年『伊那』10月号の「談話室」欄で紹介している。また昭和42年刊行の『全国遺跡地図長野県版』にも、11遺跡3古墳はそのまま掲載されている。

昭和54年になると、『長野県史考古編』、『下伊那史第一巻』編纂のため分布調査が岡田によってされ、北田・原平・明賀塚・興禅寺・桐山・十二間遺跡と城山古墳が新たに発見された。この成果は昭和56年刊行の『長野県史考古資料編全一卷（一）遺跡地名表』に、17遺跡4古墳として登録されている。但し、城山古墳はその後土砂の崩壊により遺構の構築状況が判明し、江戸時代の石室であることが明確になったため、昭和59年、岡田は『伊那』7月号に「飯田市上久堅小野子の役行者石像小考——城山古墳存在否定に関連して——」のレポートを発表し、県史所載の城山古墳の存在を否定したのである。さらに昭和57年には長野県教育委員会の要請により『長野県の城館跡』編纂のための分布調査を岡田が行ない、神之峰城跡以外に小野郷城跡及び茶臼山城跡を報告した。これは昭和58年刊行の『長野県の中世城館跡分布調査報告書』に詳しい。但し、茶臼山城は小規模のため掲載されていない。またこの年、『全国遺跡地図長野県版改訂版』が刊行されたが、最近の調査成果を盛り込んでいないため、14遺跡3古墳しか記載されず、しかも大字名や名称の間違いが多く問題を残した。昭和58年版に追加された3遺跡は、原平・越久保遺跡と神之峰城跡である。

昭和61年になると、柏原の北田遺跡一帯の農業構造改善事業が行われることになり、事前の記録保存のための発掘調査が、5月から9月にかけて実施され多大の成果をみるに至った。調査の結果、縄文時代早期住居址1軒・中期住居址50軒、弥生時代後期住居址5軒、古墳時代後期住居址18軒の合計74軒の竪穴住居址を発掘した。またこれ以外の遺構として縄文時代早期から中期にかけての土坑77基、縄文時代中期の方形配列土坑2基、古墳時代後期の掘立柱建物址25棟を検出し注目を集めた。また、出土遺物も多量で、縄文時代早期から中期の土器・石器・土偶・耳栓をはじめとし、弥生時代後期の土器・石器、古墳時代後期の土師器・須恵器・石製紡錘車・鉄製鋤先・刀子等が発見されている。この北田遺跡の発掘調査が、上久堅地区における本格的なしかも最初の学術調査であったことは特記すべきである。その後、同年10月、本書に掲載される塚穴第1号・2号古墳の発掘調査となるのである。

(岡田正彦)

3 歴史的環境

飯田市上久堅所在の遺跡は、一般遺跡17カ所、古墳4基、中世の城跡3カ所の合計24遺跡である。一般遺跡を時代別にみると縄文時代14、弥生時代1、古墳時代1、奈良・平安時代1、中世2、近世2を数えるが、単純遺跡が多く、複合遺跡は少ない。特に正式な学術調査がなされなかったため、表採遺物1点の

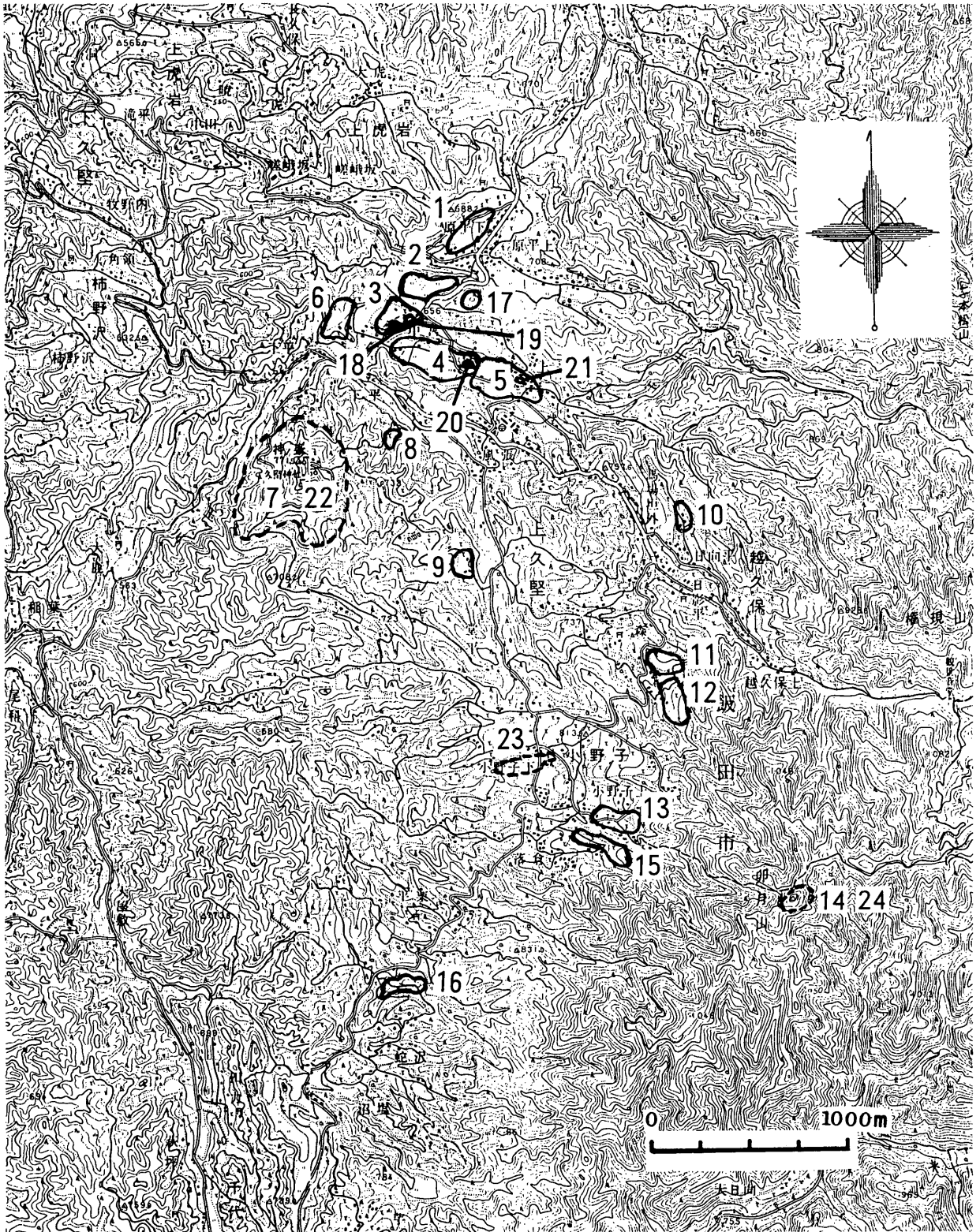
発見で遺跡としておさえられたものもあり、17カ所の一般遺跡中12カ所は縄文時代、他の2カ所は中世・近世の単純遺跡である。複合遺跡は中・近世の陶器を出土する原平遺跡、縄文時代中期土器片及び打石斧と平安時代の土師器片が発見された空前地籍を中心とする上平遺跡、昭和61年度の発掘調査により縄文・弥生・古墳時代の遺構・遺物を検出・発見した柏原の北田遺跡の3カ所のみである。

上久堅の歴史の変遷を概観してみると、現在のところ1万年以前の旧石器時代の遺跡・遺物はない。上久堅の最古の文化は、約8000年前の縄文時代早期に比定される。それは柏原の北田遺跡の発掘調査により判明したもので、検出された住居址1軒と土坑2基から想定される内容である。次の縄文時代前期の確実な遺跡はないが、北田遺跡から中期初頭の土坑及び遺物が出土している。

約4500年前の縄文時代中期後半の大集落址として北田遺跡及び興禅寺遺跡があり、前者は下伊那地方の代表的な遺跡のひとつに数えあげられている。住居址数50余軒、方形配列土坑2基及び土坑59基の検出数は注目されるものである。竪穴住居址は数期に細分されるが、現在整理中のため詳細は不明である。また方形配列土坑は掘立柱建物遺構と想定され、その性格は祭祀施設説が強く、下伊那で最初の検出である。遺物も20数個の埋甕をはじめとし顔面付釣手土器やミニチュア土器、土偶・耳栓のほか多量の各種石器が出土しており、当該時期の文化内容を語る上に多くの資料を提供したと言える。この外、中期後半の遺跡として中宮の中宮原・森の北ノ入・惣三坂遺跡も注目しておきたい。この後に続く3000～4000年前の縄文時代後期の遺物は小野子遺跡から出土した若干の土器片のみである。また縄文時代最終末の晩期遺跡は森の北ノ入遺跡があり、若干の遺物が表採されている。このようにみると、縄文時代早期に柏原地籍に定着した文化は、中期以降、上久堅の全地域に拡散し、後期・晩期で衰退したことになる。

次の弥生時代の文化が下伊那地方に波及したのは、弥生時代前期末のことであり、水稻耕作の開始に伴わないその遺跡立地に変化がみられる。弥生時代600年間は前期・中期・後期と三区別され、上久堅において発見された遺構・遺物は、今から約1700年前の弥生時代後期後半のものである。それは北田遺跡検出の5軒の竪穴住居址とその出土遺物で、土器は中島式土器が主体を占めている。北田遺跡の西北は、約10mの比高差をもつ急崖で旧河道の湿地帯（現在水田）になっており、陸耕と共に水稻耕作に立脚した集落と推定される。

上久堅の古墳時代は上平・中宮及び柏原地区においてのみその遺構がみられる。当時期を象徴する古墳は、煙滅古墳を含めて4基あり、未確認ながら地名から類推される1基を加えると5基となる。上平地区には上宮原古墳（別称空前古墳）があり、今は破壊され、高さ1mの小封土上に天井石・側壁石が散在する。須恵器片や構築石材からみて、横穴式石室を有する円墳で、その築造時期は6世紀後半から7世紀前半に比定される。中宮地区には2カ所に古墳があり、1基は玉川の西南、久堅神社境内中にある宮ノ原古墳（別称鬼釜古墳）、もう1基は玉川の北、観音丘陵直下の塚穴古墳である。前者は明治25年頃に発掘破壊され天川石が残存するが、それからみて横穴式石室をもつ円墳と考えられる。出土遺物は豊富で上久堅小学校に保管されているが、須恵器や轡等からその築造時期は6世紀末期に比定される。今回発掘調査した塚穴第1号・2号古墳もほぼこの時期に該当しそうであるが、詳細は本文を参照されたい。また、柏原の北田遺跡南東県道上段の丘陵上に立地する明賀塚は、円墳さながらに盛土の封土もみられ、地元伝承で



第2図 飯田市上久堅地区遺跡分布図 (数字は遺跡一覧表と一致する)

第1表 飯田市上久堅地区遺跡一覽

(昭和62年8月 岡田調)

分布区番号	県史番号	遺跡名	所在	地	立地	種別	時代	遺構・遺物	備考
1	509	原平遺跡	原平下		平地	包蔵地	中近世	中・近世陶器(天目etc.)	
2	524	北田	原平・北田		台地	"	縄・弥・古	縄文早中・弥生後・古墳後期住居跡・土坑遺物多	昭和61年発掘調査
3	510	中宮原	中宮原		台地	"	縄文	縄文中期土器片、石器	
4	511	興禅寺	中宮		平地	"	"	"(加曾利E式)、打石斧、横刃型石器	川井宗孝氏蔵
5	513	上平	上平		平地	"	縄・平安	磨石斧、平安期土師器片	
6	512	下平	下平		山腹	"	縄文	打石斧、鉄鏃12点	故田中英伍氏蔵
7	514	神之峰	下平・神之峰		山頂	"	"	打石斧	
8	525	十二間	下平・水元		山腹	"	近世	古銭490余枚(唐・宋銭、寛永通宝2856枚)	塩旭氏蔵
9	515	堂平	堂平		台地	"	縄文	打石斧	
10	518	桐山	越久保		山腹	"	"	打石斧	
11	516	北ノ入	森・北ノ入		山腹	"	"	縄文中期・晩期土器片、打石斧	故木下久米市氏蔵
12	517	惣三坂	森・惣三坂		山腹	"	"	縄文中期土器片、鉄鏃、打石斧、剝片	
13	519	小野子	小野子上		台地	"	"	縄文後期土器片、打石斧	
14	520	卯月山	小野子・卯月山		山頂	"	"	石器	
15	521	落倉	落倉		山腹	"	"	打石斧、磨石斧	
16	522	蛇沢	蛇沼・蛇沢		台地	"	"	打石斧	
17	523	明賀塚	原平・明賀塚		山丘	古墳?	古墳?	径3.0、高1.5M(円形)	(中世の十三塚?)
18	977	塚穴第一号古墳	中宮・塚穴		台地	古墳	古墳	円墳、横穴、須恵器・中世内耳土器、金環	昭和61年発掘調査
19		塚穴第二号古墳	中宮・塚穴		台地	"	"	円墳、横穴、土師器	昭和61年発掘調査
20	978	宮ノ原古墳	中宮・宮ノ原		平地	"	"	円墳、横穴、直刀、刀子、管玉、金環、礮、須恵器	別称鬼釜古墳
21	980	上宮原古墳	上平・上宮原		平地	"	"	円墳、横穴、須恵器	別称李前古墳
22	514	神之峰城跡	下平・神之峰		山地	城跡	中世	主郭・二~五之郭、段郭、出郭、空堀、濠米	別称床山城
23		小野郷城跡	小野子・城山		丘陵	"	"	郭・空堀	
24		菜白山城跡	小野子・卯月山		山頂	"	"	郭	

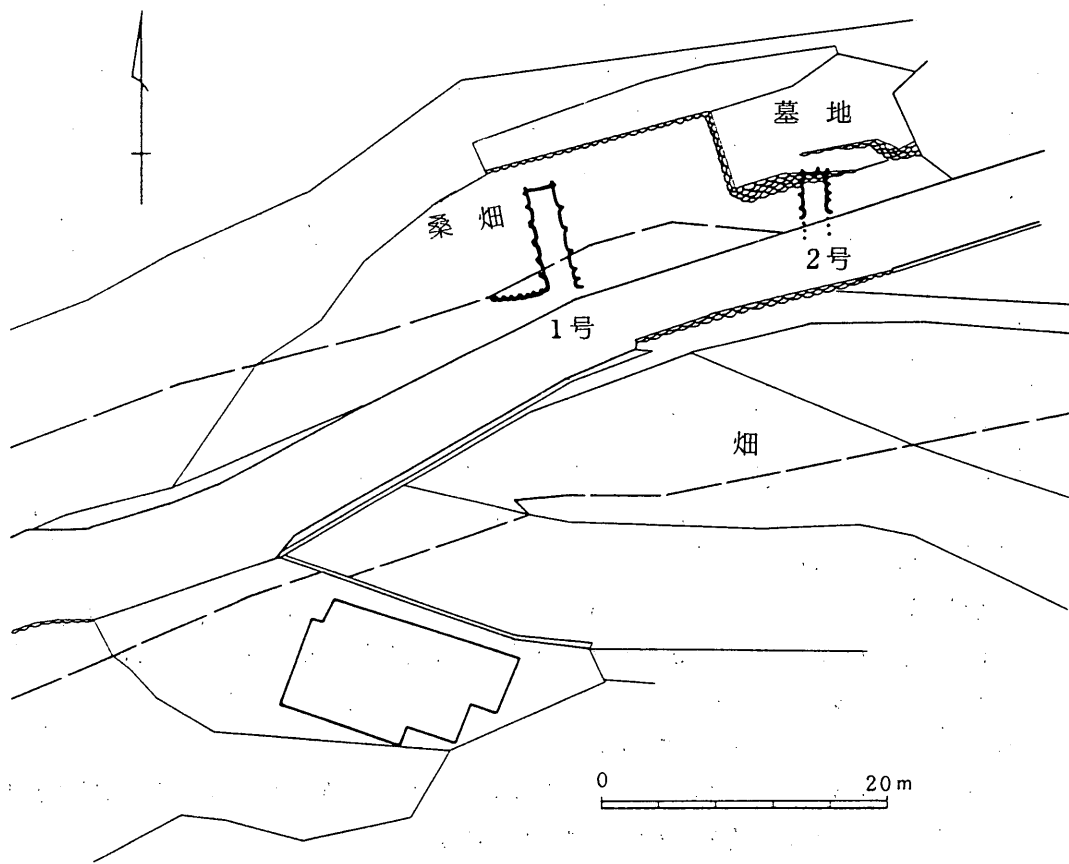
は塚から土器が出土したとも言われ、古墳としての可能性が強い。いずれにしろ以上5基の古墳に埋葬された人達の居住地、すなわち集落址は一体どこであろうか。全国的な類例からみれば、上宮原古墳・宮ノ原古墳及び塚穴古墳の被葬者の居住地は、玉川の西南一帯の平坦地、換言すれば玉川と馬場台地に挟まれた空前から久堅神社や興禅寺一帯の水田を中心とする地域と考定したい。また、明賀塚の前面に展開する北田遺跡から、古墳時代後期の竪穴住居址18軒、建物跡25棟が検出されたことは注目したい。塚穴古墳の後背地にあたり、直接の関係は不明であるがこの集落の存在は当該地区において重要な意味をもつ。同一集落内における時間的差異は認められるものの、一体、この起伏の激しい地域での生産基盤は何であったのか。東日本でも珍しい古墳時代の建物址の存在は何を意味するのか。竜東地区で最高地に立地する古墳の被葬者（豪族）の存在は何を示唆しているのか。上久堅の古墳時代の疑問は尽きない。

次の奈良時代の資料は現在発見されていない。しかし1000年前の平安時代の土師器片は上平遺跡において出土しており、この時代に居住者がいたことを裏付けている。

中世に入ると当地方は伴野庄の一部であり、神氏系の豪族知久氏が下久堅知久平に居を構えて一帯を統治している。室町時代の文亀年間（1501～1504年）、知久氏は戦国時代の世相を考慮して、その根拠地を上久堅の神之峰城（床山城）に移し、竜東一帯を支配していたことが、当時の文献により理解される。その時代を語る遺物は原平遺跡に多く散布し、また中世城館跡を示唆する地名や遺構も小野郷城跡や卯月山の一角にある茶臼山城跡等により判明している。さらに知久氏の建立した寺院、俗に知久18カ寺中現存するものは、中宮の興禅寺と上平の玉川寺があり、いずれも古墳時代の集落址を想定した場所に建立されている。神之峰城が落城するのは天文23（1554）年、武田信玄による攻撃のためであるが、その後知久氏は再興し、幾星霜を経て江戸時代になると番木村阿島に3000石の旗本として幕末まで隆盛を極めていく。

以上みてきたような自然的・歴史的環境の中に塚穴第1号・第2号古墳は立地しているのである。

（岡田正彦）



第3图 塚穴1号・2号古墳石室位置图

Ⅲ 調査の結果

1 塚穴1号古墳

1) 内部主体

花崗岩自然石を用いた横穴式石室である。

主軸方向は、N12° Wを測り、ほぼ南方に開口する。開口部の規模は、底部幅1.74m、高さ2.6m、天井部幅1.7mとほぼ垂直であるが、奥壁部は底部幅1.92m、高さ3.15m、天上部幅1.6mと持送り状となる。全体の平面形は入口部をやや狭めているが、ほぼ長方形をなし、確認した石室底部全長は7mを測り、葺石、閉塞石等の状態から、底部はほぼ原初の大きさを示すものといえる。

(1) 側壁

基本的には、偏平な面を持つ花崗岩の自然石を用材として、高さ2.6～3.15mを測る。壁面を成す個々の石は、それぞれ規模は異なり、大型の用材が底部付近に多く、上部は小型のものが多く用いられる傾向にある。また、基本的に壁面を構成する用材と用材との間に生ずるすき間には、小形の礫を詰め、全壁面を石により構築している。

右側壁は見かけの大きさで、幅0.9～1.6m、厚さ0.7～1mを測る石を2段に積んで基部とし、それ以上天井石までは、幅0.6～1.3m、厚さ0.25～0.4mの平石もしくは30×30cm前後の石とできれいに積み上げ上下2段の積み分けが認められる。

全体的にはほぼ垂直の面を成している。

左側壁は、右側壁のような積み別けは認められず、全体的には下部に大型の石を、上部に小型の石を用いて順次積み上げ、総体で約30cm程の持ち送り状となる。

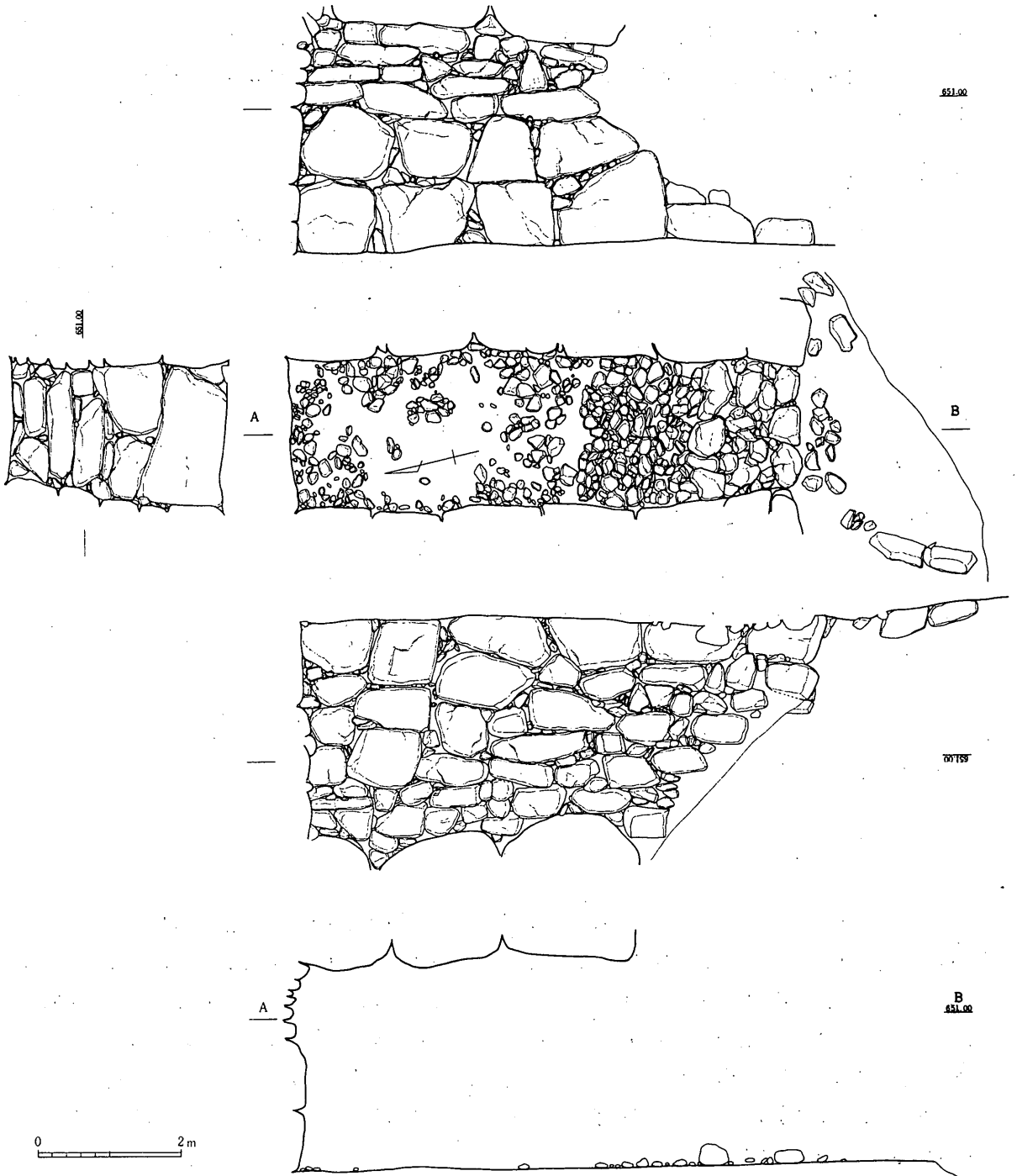
なお、石室入口側の側壁は、左右両側ともに最下段を除き上部はすべて削取されていた。

(2) 奥壁

側壁同様の構築状況であるが、壁面はほぼ垂直を成す。石積みの状況は、基本的な形として、5段にわたり水平に順次積み上げられており、これは右側壁の積み上げ法に共通するものと考えられる。

(3) 天井石

天井石は、3個が残存し、側壁及び奥壁上にかけ渡した状況がある。いずれもかなり大形の石で露出面は若干の凸凹はあるがほぼ平坦である。開口部から奥壁に向かって40cm程高くなる。開口部に残存するも



第4图 塚穴1号古墳石室

のは2.3×1.8m、厚さ40cmを測り、他は見かけで1.9×1.5m程で、やや小ぶりである。

なお、入口側の部分は側壁も上部が欠失しており、1～2個の同規模の石材を用いた天井部があったと考えられる。

(4) 底面

側壁の残存する範囲での平面は、幅1.92m、長さ7.1mのほぼ長方形をなす。側壁の先端部に径50cm程の比較的大形の石を直線的に並べ石室の内と外を区画し、かまち石的な性格を示している。それから内側へ1m程の間は、径25×40cm前後の石を乱雑に並べその境として入口部同様やや大形の石を直線的に並べている。

それより奥壁寄りについては、全体のかかなりの部分が後世による攪乱（盗掘）のため、明瞭な形での石敷を検出した部分は入口部及び壁ぎわ部分のわずかであった。わずかに残った石敷の状況から、径10×15cm前後の礫の平坦面を上部として丁寧に敷き並べられていたことが予測される。

(5) 閉塞石

石室底面で触れた入口部分については、旧状で土砂の堆積した高さの真下から径20×40cm前後の礫を積み上げた状況で検出され、閉塞石であったと思われる。

(6) 石室形

石室の形状等は前述のとおりであり、それを全体的にみると入口部に若干羨道を意識した石敷部はあるが石室・羨道の区別されない長方形の横穴石室といえる。

2) 前庭部

旧道路敷下となっていた部分であり、その全容については不明であるが、石室左右両側壁からやや開くが連続する形で径50×40cm～20×30cmの石が直線的に並べられ石室前庭部を意識しているものと考えられる。しかし、旧道路建設時に先端部は削取され石室入口から1～2.5mの巾が残るのみで全体形は不明である。また、残存部も旧道下のためわずかの層が残るのみであるが残存部先端は、すでに原地形による傾斜が始まる部分であり、当初からあまり広い前庭部は有しなかったといえる。

残存部における状況は、全体的に漆黒色土中に径20～50cm位の石・礫が入り込み、石礫間に須恵器、鉄製品類か小破片となって出土した。

3) 墳 丘

(1) 墳 丘

県道改修部分のみの調査であり、地山と盛土との差を明瞭に認め難く、墳丘の全容把握は困難であったが、葺石及び周溝とからおよその規模を推測した。

道路側面の土層観察により、把握した墳裾幅は11mであり、この位置が墳丘中心部から前方に位置しており、石室規模等勘案して本来の墳丘径は20m前後であったと推測される。

墳頂部は桑畑であり、削平され、石室天井石直上から耕作土となっている。現状で天井石上の封土はごくわずかであるが、葺石面の傾斜等から、原形は現在の墳頂とあまり大きな差はなかったと考えられる。

(2) 葺 石

調査前の段階では、全くその存在を予測しなかった石積が、石室左側の墳丘斜面から検出された。

石室左側壁端部外側に連続し、右寄底部を最下位として1m程の高さで西方に向かって石積みめぐるされる。

墳丘自体が傾斜地に築造されているため、石積の最下段も西方に行くにしたがって順次高位となる。

石積みの状況としては、下段の0.8～1m程は石垣状にほぼ垂直に積み上げ、それより上は傾斜を持ち墳丘斜面を成すが、上部では石そのものが確認できなくなる。

使用石材は、10×20cm～30×50cm程の自然角礫を用い、比較的大型の石を主としている。

墳頂部において葺石が認められなかったわけであるが、本来全面葺石が覆っていたか否かは断定できず、葺石として扱ったが、墳裾部のみに構築された外護石積みとも考えられる。

なお、石室右側墳丘斜面は、現道路により削り取られ石積の確認はできなかった。

(3) 周 溝

石室南西部の道路に面した断面に地山の黄色砂土と明瞭に異なる黒色土が大きく凹地状に認められ、墳丘と外部を区切っており周溝として扱えた。

周溝端部は明瞭に把握できなかったが、地形から判断して、石室入口から約1m西方付近であり、それより奥に存在していたと考えられる。

周溝底は、石室入口付近で石室底部（前庭部）に始まり、地形に沿って西方へ順次傾斜して高まっている。

西端部での周溝規模をみると、幅3m、深さ0.6mを測る。周溝外端をどの部分とするかは若干あいまいな点もあるが、外側はゆるやかに傾斜した壁面を成し、葺石底部が周溝底部と一致する。

周溝内は、葺石用材と思われる礫の転落はほとんどなく、埋没状況は、墳丘以外の外側部分から主で

あったと判断される。

なお、石室の東側部分については、他と同様に道路により削取され、かつ、上部にある墓所への入口の道が造られ、確実な位置等把握はできなかった。

(4) 土 層 (第5図)

古墳築造に関連して、地形及び墳丘自体の土層状況の観察が重要な意味を持つわけであるが、地形を形成する地山と墳丘盛土との変化は微細であり一部不明瞭な部分もあるが、その観察状況を以下に記す。

なお、2号古墳の土層についても本項で一括して記述する。

1層は地形全体を覆う表土で、一部黄色砂質土を含むが全体としては黒色を呈する。耕作土及び地形造成による攪乱土である。

2～7層は丘陵斜面の崩落土で色調もそれぞれ黒色の強いものや地山の色に近いものと微妙に変化しており、それぞれが堆積状況・堆積期間等に差があったことを示している。

8～11層は1号墳における周溝覆土である。周溝内の堆積状態は比較的良好に層序を成すが、前述のとおりに傾斜地にあるため一部水流等による複雑な状況を示す箇所もある。11層は褐色の砂質土で地山の土に近いものでこの土に覆われた葺石が良好な状態で残存しており、古墳築造後の早い時期に一気に堆積したもので、かつ、周溝のかんりの部分を埋めたと考えられる。

また、10層は他の土層に比べかなり黒色が強く漆黒色を呈している。植物繁茂が推測され、墳丘形状を一定期間ととめていたのは本上層の堆積期間といえる。

12～27層は1号墳の盛土である。丘陵斜面の鞍部を掘り下げ、そこに石室を構築後盛土したものと考えられる。全体に地山の土との差異はわずかであるが、黒色土や砂質が強い土層や砂利を含む土層などが認められ、いずれも人為的に盛り上げられた土である。特に19～27層は土層内でも更に薄い層の確認される部分もあり、何回にもわたって積み上げられたもので、ハンテク的な技法も用いられた可能性もある。

2号墳について全体的な土層状態は1号墳周辺の状況とほとんど同様であるといえる。2号墳について、墳丘を区切る周溝的施設の存在は断定できないが、1号墳と2号墳の間に8層の凹地状堆積があり、同層内に6層のレンズ状堆積が認められその可能性が指適される。

28～31層は石室構築に関連した土層で、いずれも褐色系の色調を示す。

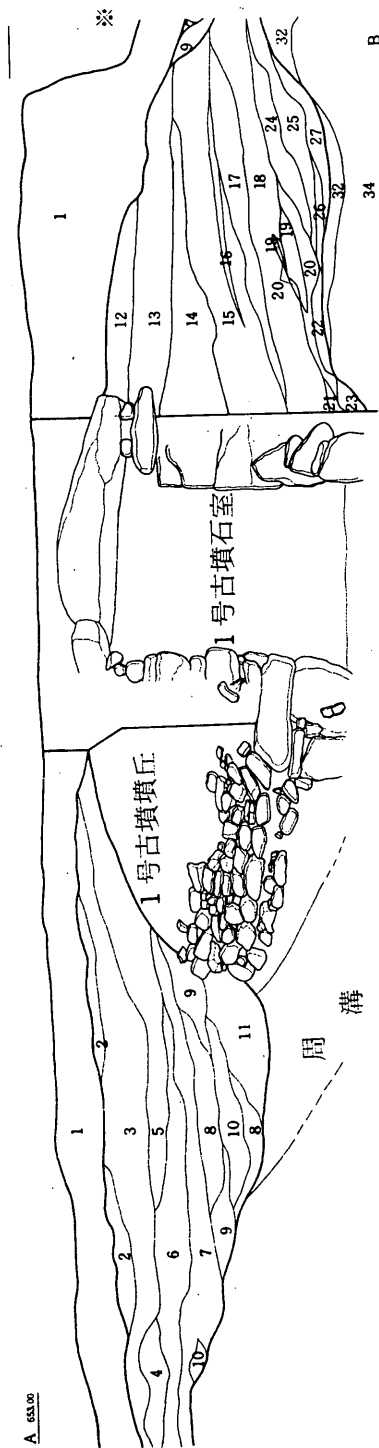
28～30層は石室側壁を固定するもので、28・29層には砂利が、30層には炭化物が含まれる。31層は、石室底面を構成する土である。

なお、2号墳については、石室外側は丘陵の地山そのものであり、1号墳のような石室構築後の盛土は確認できなかった。

32層は丘陵鞍部のみに堆積したもので1号墳下部に存在する。同層は縄文時代遺物の包含層である。

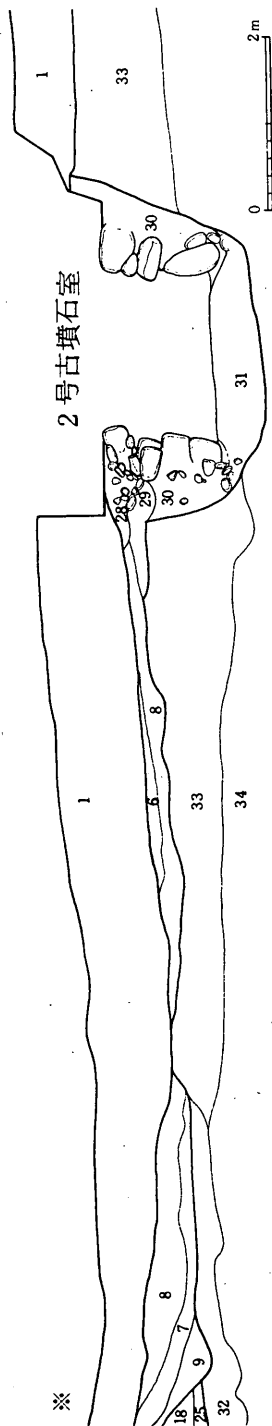
33・34層は丘陵形成の地山で、基盤の岩盤の風化層である。34層の下部は基盤の花崗岩岩盤である。

A 651.00



651.00

B



- | | | | |
|--------------------|--------------------|----------------------|------------------|
| 1 黑色土 (表土) | 10 漆黑色土 | 19 茶褐色土 | 27 明褐色土 |
| 2 暗褐色土 | 11 褐色砂質土 | 20 黄色砂土 | 28 褐色土 (石含む) |
| 3 褐色土 | 12 黑色土 | 21 褐色土 (黄色土含む) | 29 暗褐色土 (砂利混り) |
| 4 黒褐色土 | 13 黒褐色土 | 22 暗褐色砂質土 | 30 黒褐色土 (炭含む) |
| 5 明褐色土 | 14 褐色土 (砂利混り) | 23 黄色砂質土混り暗褐色土 | 31 赤褐色土 (小石砂利含む) |
| 6 明褐色土 (黒土含む) | 15 暗褐色土 | 24 茶褐色土混り黄色砂土 (砂利混り) | 32 漆黑色土 |
| 7 暗褐色土 (砂利混り) | 16 褐色土混り黒色土 | 25 同一土層が数回のうすい層を成す | 33 褐色土 |
| 8 黒色土 | 17 黄色土混り褐色土 (砂利混り) | 26 黄色土混り茶褐色土 (砂利混り) | 34 暗褐色土 |
| 9 黒色土混り暗褐色土 (砂利混り) | 18 褐色土・黒色土混り黄色砂土 | | |

第5図 1号・2号古墳土層

4) その他

(1) 石室内中世遺構

石室内には相当量の土砂が堆積しており、ある程度人為的に埋められたと考えられる部分がある。石室内部にかかなりの火を使った痕跡が認められ、埋土中層より、人骨・鉄釘・内耳鍋等が出土することなどから、中世において火葬場もしくは埋葬の地として用いられたと考えられる。

(2) 縄文時代遺物包含層

前述のとおり本墳の築造位置が、丘陵鞍部ということで、基本的な地形形成後の自然の土砂堆積がかなりの厚さであり、本墳築造位置もかなりの土砂堆積があり、墳丘下部にも黒色土の縄文時代遺物包含層が認められた。

出土遺物の時代的内容としては、縄文時代早期末の土器片・同後期土器片・石器等が位置を変えて出土しており、斜面に立地する縄文時代の遺跡として捉えられる。

5) 遺物

石室内及び前庭部を主に若干の遺物が出土した。

(1) 土師器

土師器の出土はごくわずかで、石室内及び周溝内より甕の小破片3点のみである。

(2) 須恵器 第6図(1~11)

土師器に比べその出土量は多く、本墳に関連する出土遺物の大半を占め器形を知るものも何点かある。

1は、甕の口縁部で1/8程の破片で、石室内敷石直上の暗褐色土から出土した。口縁端部は台形で、比較的丸く仕上げられ、刺突による施文下に先端部の丸い工具で施された2条の沈線がある。胎土中には微少石粒が混入し、焼成は普通である。明るい灰色を呈し、内面には緑色の自然釉があばたに付着している。

2・3は甕の胴部で、2者とも胎土中に微少石粒を含み、焼成は良好、明るい灰色を呈している。2は前庭部の漆黒色土中から出土し、復元はできないが同一個体が胴部の1/3程ある。外面に叩き痕を残し、内面は丁寧なナデ整形である。3は前庭部、石室内、葺石中から出土したものが接合し、胴部から肩部にかけて1/4残存する。外面は叩き後7~4本を単位とする細い沈線が1~2cmの間隔で施文されている。内面は丁寧なナデ整形が行なわれている。また、外面の一部に黄緑色の自然釉がかかっている。

4は、蓋坏の蓋で、前庭部の漆黒色土と、これに乗る黒色土中のものが一部接合した。接合しない破片も含め1/2程残存している。天井部はほぼ平坦に浅く、形骸化した稜を持ち口縁部に至る。口縁部は、内側を強く押さえた片刃状である。胎土中に微少石粒が混入し、焼成は良好、内外面ともねずみ色を呈し、天井部のほぼ全面に濃い緑色の自然釉がかかっている。

5も蓋坏の蓋で、前庭部の漆黒色土から出土した。1/2残存している。口縁端部はややふくらみを持ってほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は浅くほぼ平坦で、形骸化した稜を持つ。胎土は微少石粒を含み、1~2mmの黒点が認められる。焼成は良好であるが、大小の火脹れが全体に認められる。内外面ともねずみ色を呈する。外面の一部には乳灰色の自然釉がかかる。

6は蓋坏の身で、前庭部、漆黒色土中より出土した。1/4残存する。底部は平らでケズリにより整形され、口縁部にはロクロの水引痕が顕著に認められ、たちあがりは内傾し、端部は丸い。胎土は精選されたもので、わずかに微少石粒を含み、0.5~2mmの黒点が浮き出る。焼成は良好である。内外面とも明るい灰色を呈する。底部から受部の外側に緑色の自然釉が認められる。

7は高坏の坏部で1/2残存している。石室入口右隅の敷石に、破片となって密着して出土した。口縁部がほぼ垂直に立ち上がる深いものである。口縁端部は丸く、器壁は薄くロクロにより仕上げられている。外面はほぼ中央に浅い沈線が二条施されている。胎土は微少石粒をわずかに含む。焼土は良好である。内外面とも明るい灰色を呈し、内面のほぼ全部と、外面の一部に、濃い緑色自然釉がかかり、外面は自然釉が剥落し乳灰色を呈する。

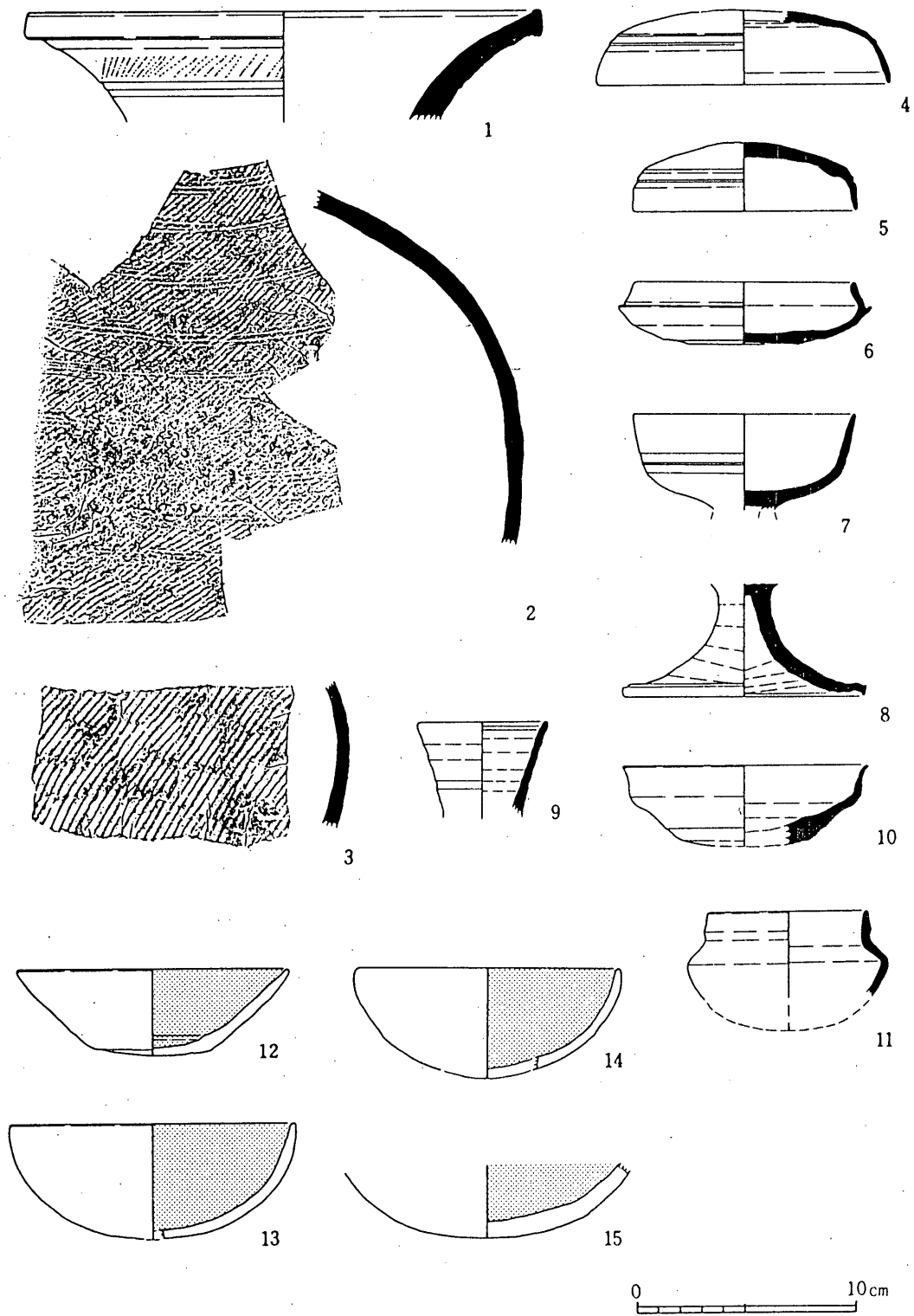
8は高坏脚部で、石室入口部から2m程入った中央部の敷石にはさまって出土した。脚端部の大半と坏部を欠く。基部は細く、外反して下がり、段を持って端部に至る。端部は断面三角形を呈す。胎土中に多量の微少石粒が混入しているため器面がザラザラしている。焼成は良好である。内外面とも灰色を呈し、外面はロクロのナデ、内面はロクロを使ったケズリによって整形されている。

9は、提瓶、又は平瓶の口縁部片で1/2残存する。敷石が原初のまま残存する部分の右壁側奥に石と密着して出土した。口縁部内側と頸部の近い所に、先端の丸い工具による、沈線が施されている。胎土中には微少石粒が混入する。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。外面の一部には黒色の、内面には濃い緑色の自然釉がかかり、一部剥落した箇所もある。

10は坏と考えられるが、自然釉のかかり具合から蓋の可能性もある。石室入口から2.5m入った中央部に、40cm程の石にはさまって出土した。2/3残存する。胎土は精練されたもので、焼成は良好である。ロクロによる整形もきわめて良好で、内面は明るい灰色、外面はねずみ色を呈する。

1号墳石室に伴う土器で図化できたものは須恵器のみである。ほかに須恵器には、石室内より、甕、蓋坏、前庭部より、壺、坏、提瓶、小型短頸壺、(第6図11)甕の破片が出土している。土師器の出土はきわめて少なく、石室内より、甕底部、小型の壺胴部、周溝覆土中より甕胴部の破片が出土したのみである。

出土須恵器のほとんどが7世紀前半の様相を示し、一部7世紀中頃の様相を示すものも含まれるが、ほぼ同一時期の所産といえる。



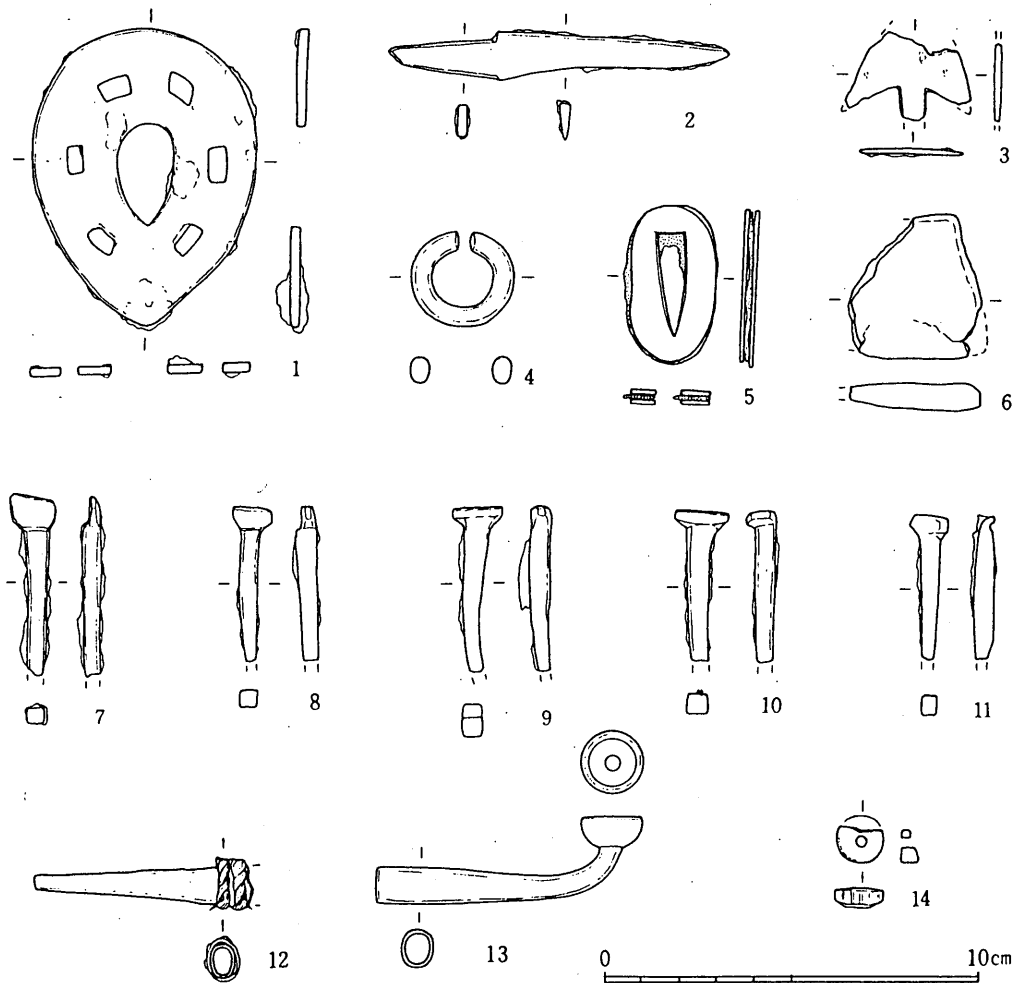
第6图 塚穴1号・2号古墳出土土器 (1/3)

(3) 金属器 第7図 (1・3~13)

1号墳から出土した金属器には第7図1・3~13があり、1・3・4が、本墳に伴うもので、5~13は中世以降のものである。

1は鉄製の鐙である。入口部より2m程入った右壁ぎわに、閉塞石に使われていたと思われる30cm程の石下から出土した。縦7.8cm、横5.9cm、厚さ2~3mmを測る。倒卵形を呈し、長方形のすかしが6ヶある。

3は平根の鉄鏃である。入口部より1.5m入ったほぼ中央部、敷石上から出土した。保存状態がやや悪く、先端部、茎端部、逆刺端部を欠く。残存部に刃はほとんど認められず、断面形は板状である。残存部最大幅3.4cm、厚さ2mmである。



第7図 塚穴1号・2号古墳出土金属器・石製品 (1/2)

4は金環で、奥壁から1m中軸線よりやや左壁寄り、敷石が抜き取られた部分の床土中から出土した。外径1.7cmを測る。断面は楕円形で7×5.5mmを測る。保存状態はやや悪く、ほとんど金箔ははがれ落ちており、銅表面が露出する。

5は刀の切羽で、石室覆土中から出土した。小判形を呈し、銅製である。保存状態は比較的良好である。3.1×2.4cm、厚さ1mmの板が2枚重なり、間に皮のようなものがはさまっている。また、茎を通す穴の背に当たる部分は、わずかに内側へ丸く張り出している。中世の遺物と考えられる。

6は刀の破片とも考えられるが、石室覆土の中世面から出土している。保存状態も悪く断定できない。

7～12は鉄釘で、出土層は中世面から近世の埋土中である。保存状態は悪く、すべて先の部分を欠いている。残存している部分の長さは3.6～4.7cmを測る。断面形は四角く、太さは5～6mmである。頭部の形態は2種類に別けられ、つぶしているだけのもの2点(7・8)、つぶした後、折り曲げているもの(9・10・11)がある。

12・13は青銅製のキセルで、中世面上部より出土している。12は6.7cm残存し吸い口部と、木質部となる部分が欠けている。木質部との接合部分は竹と思われる植物の紐により固定され、破損部内側に一部残っている。保存状態は悪い。13は木質部分から吸口が欠けており、12・13は同一個体の可能性がある。

(4) 石製品 (第7図14)

石製品は、敷石直上の土と前庭部の土を現場で一部水洗した際、敷石直上の覆土から出土した1点のみである。

直径1.2cmを測る大形のもので、一方の孔の面と縁の1/3が欠けており、厚さは残存部で5mmである。側面に荒い削り痕を残すが、孔の面には認められない。石質は滑石で灰色を呈す。

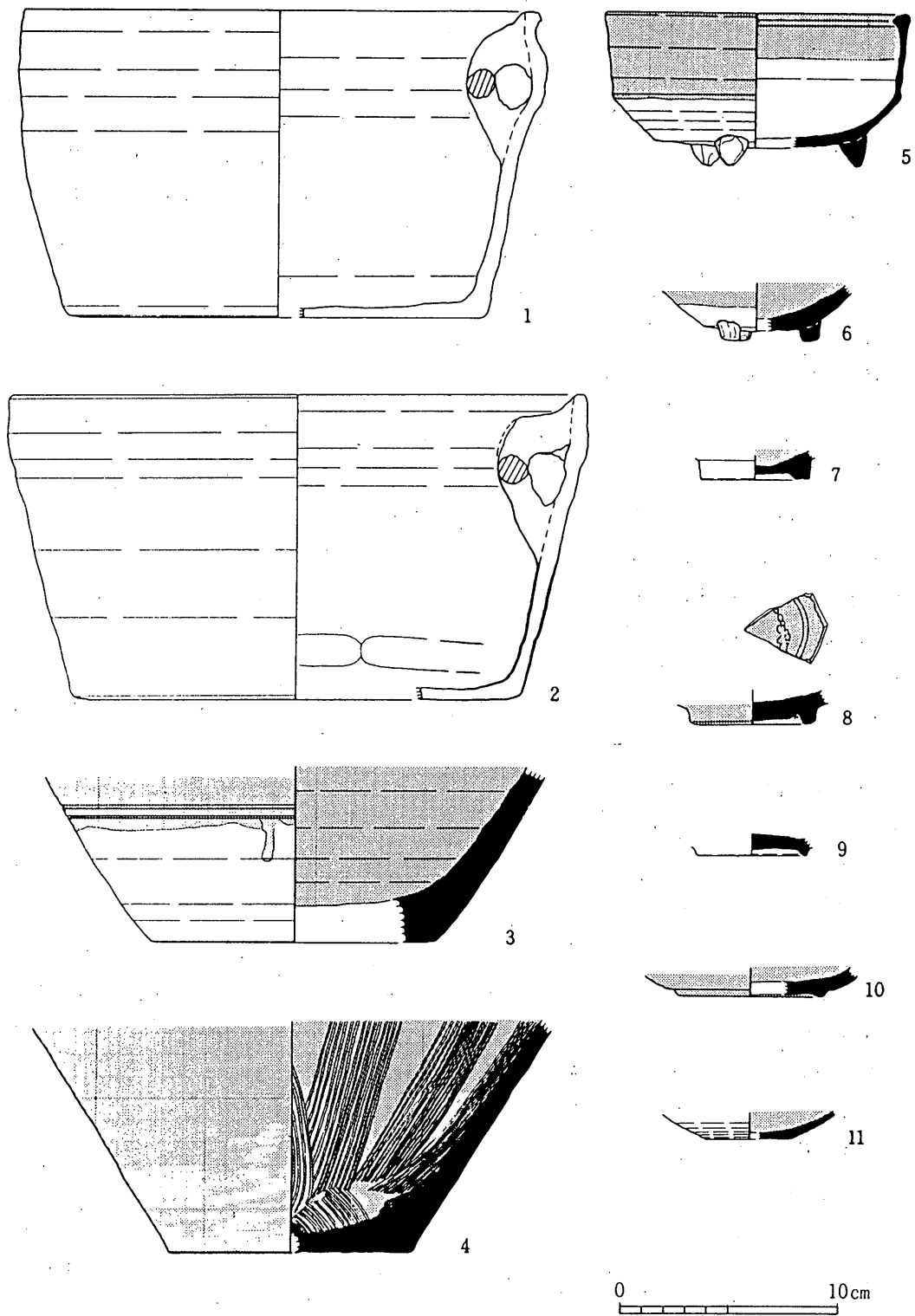
その他の遺物として、石室入口部付近と、水洗時に、わずかではあるが、人骨と思われる骨が出土している。

(5) 中世土器 (第8図1～11)

石室覆土中で確認した中世面は2層あるがこれらの遺物が、どちらの面に所属するかは確認できなかった。

1と2は、内耳鍋である。1の胎土は雲母、微少石粒が多量に混入している。焼成はきわめて良好で堅い。接合しない破片も含め1/3程残存している。口縁端部は平らに仕上げられ、口縁部に近い部分はロクロを使った指頭の強いナデで整形されている。取手部分は、使いやすくするために穴の部分に当たる部分の器壁を外へ押し出している。内外面とも茶色を呈し、外面全体に厚くススが付着している。

2は1/2残存し、胎土中に微少石粒、雲母を多量に含み、赤粒も見られる。焼成は良好であるが内面器壁は荒れている。口縁部に近い所と底部からの立ち上がり部分には指頭によると思われる凹凸が顕著で、器種が薄くなる。取手は三角形に近い形で付いている。口縁部は1に比べ丸く仕上げられているが、口縁端部は部分的に平坦面が認められる。外面はススが全体に付着し茶色で、内面は明るい茶色を呈している。



第8图 塚穴1号古墳出土中世土器 (1/3)

他に同様内耳鍋の破片があり、さらに2～3個体存在した可能性もある。

3は陶器鉢の底部で1/4残存する。胎土中に小石粒を含む。焼成は良好で、断面はうすい黄色を呈する。内外面ともに鉄釉がかけられているが、外面は厚いため、にぶい茶色で内は灰茶色となる。全面に釉薬が施されているため整形は不明であるが、残存部上端部に沈線が見られる。

4は摺鉢底部で1/2残存する。胎土中に石粒を含み、焼成は良好である。内面のかき目は幅3cmで14条の凹み部を作る工具で施されている。外面はナデと細いケズリによる整形である。内外面全体に、にぶい茶色の釉薬が施されている。底部と外面下部には、はけでぬられた痕跡が認められる。

5は、香炉で1/2現存する。脚が3個付くもので良品と思われる。胎土は精練されたもので、焼成は良好である。茶白色を呈す。底部に細かなケズリによる整形が見られる。立ち上がり部分には内外面とも乳白色の釉薬が施されている。外面の釉薬の施されていない部分には、底部まで全面にススが付着し、内面にもうす茶色の付着物が見られ、二次的に香炉以外の用途に使われたものと考えられる。

6は底部のみ1/2残存する陶器である。5と同様に3個の脚を持ち、香炉と思われるが、内面全体に鉄釉を施し、こげ茶色を呈する。脚を持つ小皿、又は向付けかもしれない。胎土中に小石粒を含み、焼成は良好である。外面は現存上部に釉薬が見られ、底部までケズリによる整形のみで、雑な感じを受ける。外面、断面は茶白色を呈する。

7は天目茶碗の高台部である。胎土は微少石粒をわずかに含むもので、焼成は良好である。鉄釉が内面のみ認められ、茶色を呈す。外面は黄灰色を呈する。削り出し高台で、高台端部はわずかに凹みを持つ。

8は青磁の底部1/6程の破片で皿と考えられる。胎土は精練され、焼成もきわめて良好であるが、二次焼成を受けており、色調は黒色部と褐色部とに分かれる。高台部は面取りしやや丸みを持つ削り高台である。高台内側に細い沈線が見られる。内面中央に花文とみられる文様がありその外側に沈線を施している。釉薬は二次焼成のため淡緑色を呈し、内面全体及び外面の高台部まで厚く施される。

9は皿の高台部で1/3現存する。胎土は精練されたもので、焼成は普通である。色調は白色を呈する。高台は薄く低いケズリ出しにより作られ、ロクロのナデ整形が行なわれている。全体に施釉されているが、二次焼成のため全体が乳灰色を呈し、本来の釉薬等は不明である。

10は志野焼皿の底部片で1/4弱残存している。胎土中に微少石粒を含み、焼成は普通、断面色調は茶白を呈する。断面三角形の低い高台を持ち、ケズリ出しにより作られている。底部にはトチンと思われる粘土魂が付着しており、かき削っているが高台部より高い。内外面とも全面に光沢のある白色の志野特有の釉薬が厚く施される。

11は皿の底部片で1/4現存する。胎土は精練されたもので、焼成はきわめて良好である。色調は灰白色を呈する。丁寧なロクロ整形が行なわれており、底部にはケズリ痕をそのまま残し、ススが付着している。

(佐合英治)

2 塚穴2号古墳

1) 内部主体

1号墳同様に花崗岩自然石を用いて横穴式石室である。

主軸方向は、真北でほぼ1号墳と同方向に開口する。

残存部がごくわずかのため、石室全体形を知ることはできないが、残存部での底面形は、幅1.72m、長さ2.9mの長方形を成す。

(1) 側壁

奥壁寄りの一部が残るのみで、かつ上部も削平されている。

左側壁の残存状況は、底部で2.9m、上部で2.2m、高さ1.64mである。2号用材は1号墳に比して全体に小型である。壁面はほぼ垂直である。

右側壁は、左側壁より更に壊されており、底部長2.3m、上部長1.65m、高さ1.63mを測る。

用材は、左側壁に比べ若干大型の石を用いており、奥壁寄りで若干内傾しており、持ち送り状に積まれていた可能性がある。

(2) 奥壁

幅は底部で1.8m、残存部の上端で1.7m、高さ1.7mを測る。

用材は基底部に比軽的の石を用い、ほぼ垂直の壁面を成す。

(3) 底面

壁ぎわの一部に0.1×0.2m程の礫が散在しており、石敷であった可能性がある。しかし、残存部、入口付近の底面上から土師器等が出土しており、本来石敷等なかったとも考えられるが、不明である。

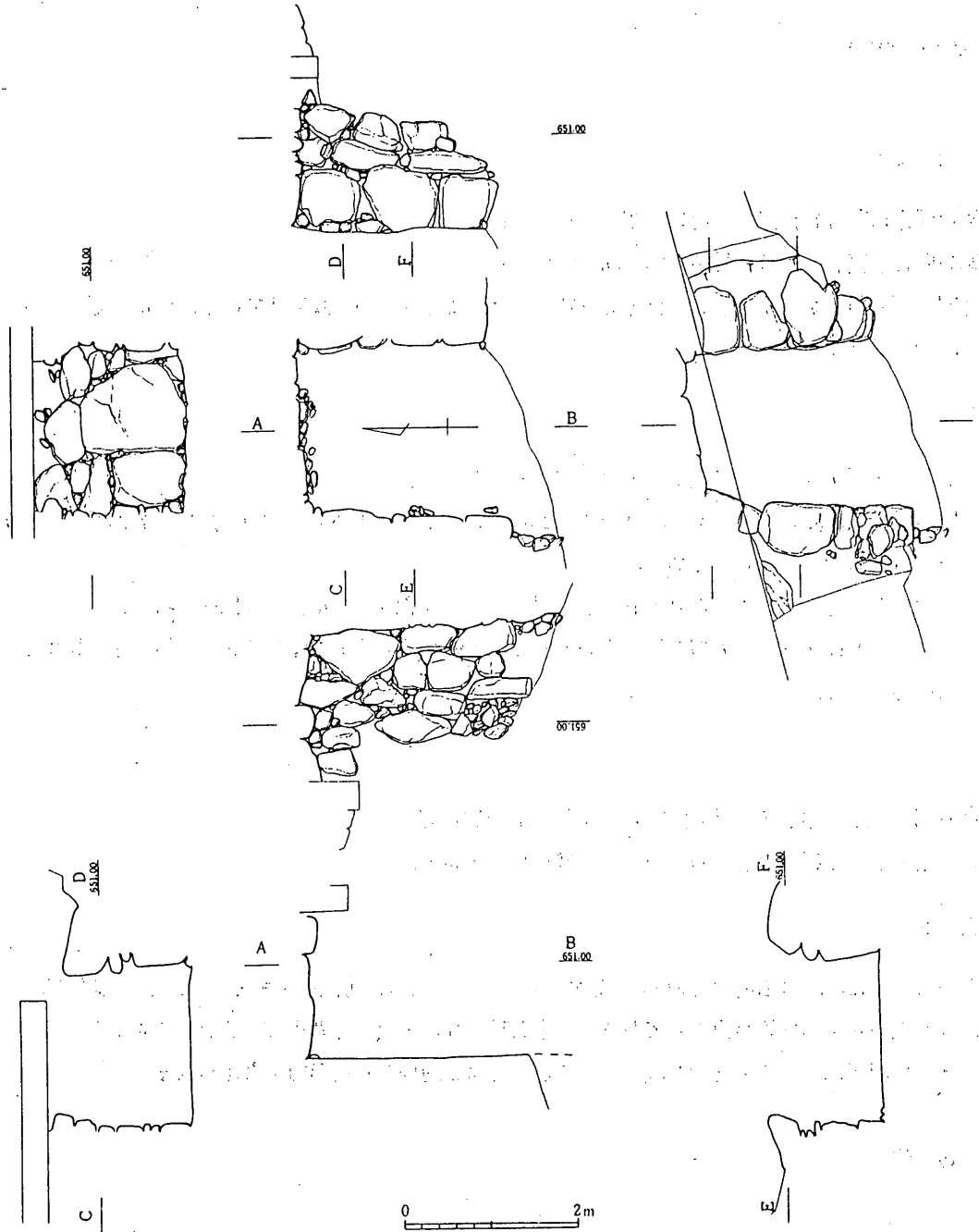
残存部の平面形は、ほぼ長方形を成しており、1号墳と同様の石室形態が考えられる。

2) 遺物

(1) 土師器 (第6図12~15)

いずれも内面黒色の坏で、残存部入口付近の床面上より出土した。

12は、底部が若干丸味をおびる平底で直線的に外反する口縁部を成し、端部は丸く仕上げられる。器面がかなり荒れ、整形痕等は不明である。



第9图 塚穴2号古墳石室

13～15は同形態であり、口縁部から底部に全体に内湾し丸底となるもので、法量もほぼ一致する。これらも器面の荒れが激しく、整形痕等不明である。

図化できたものは以上であるが、他に同様の坏小破片が若干ある。

(2) 須恵器

石室埋土中より、短頸壺片が1点出土したのみである。小破片のため図化不能である。

(3) 金属器（第7図2）

2号墳から出土した鉄製品は、刀子1点のみである。石室開口部から1m、中心線よりやや右壁寄りに出土した。床面上で土師器坏等の出土したままとまりの中に入っている。保存状態は、良好である。長さ9.1cm、元幅1.3cm、厚さは背の部分で3mmを測る。刃部がかなり砥ぎ減りしており、特に中央部は、もともとの刃部とは逆の弧を描くように減っている。茎は、つけ根から序々に細くなるもので、先端部を欠く。断面形は長方形で、厚さ3mmを測る。

（吉川 豊）

3 縄文時代遺物包含層

1) 早期（第10図1～4）

1号墳北端の周溝と考えられる位置の下部に縄文時代早期末と考えられる薄い層を確認した。

調査面積はごくわずかであり、出土遺物も土器数片と具体的な状況等の把握はできなかった。

土器片はいずれも胎土中に繊維を含む。1・2は同一個体である。3は、内外面ともに浅い条痕が施されている。

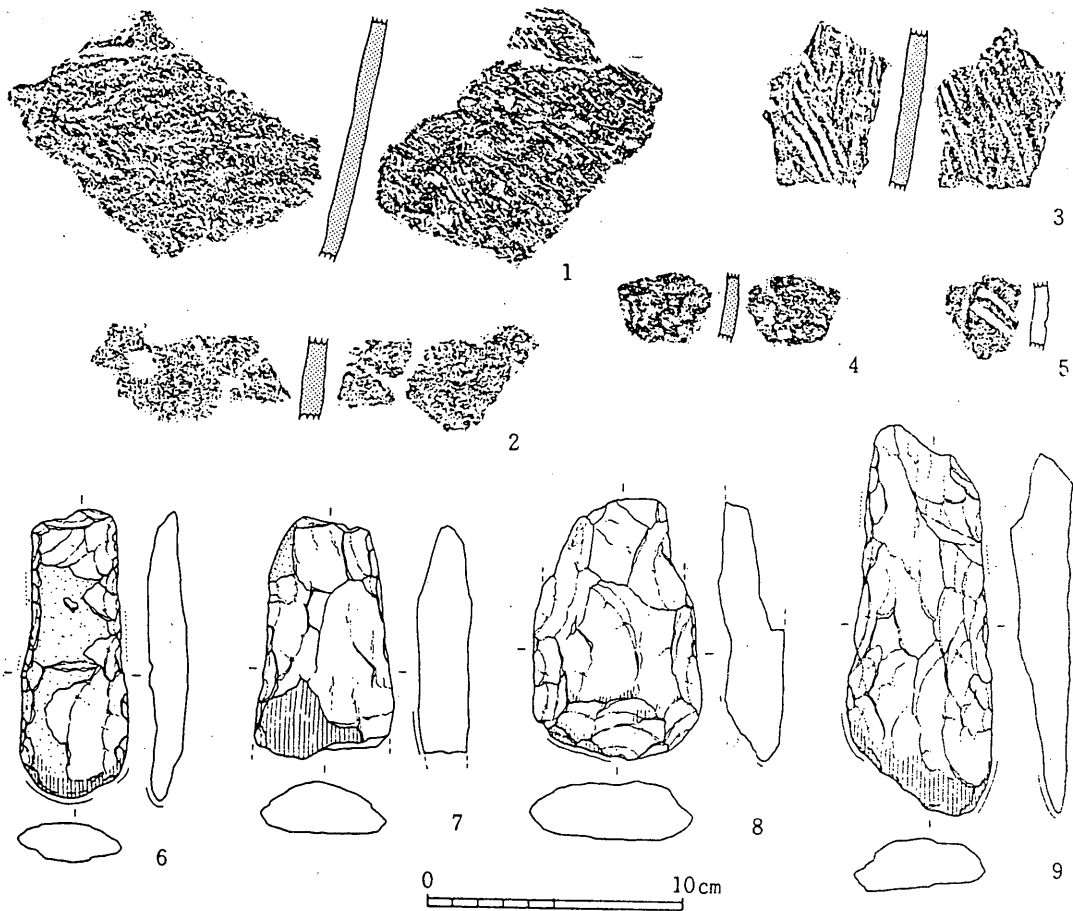
図示した以外の破片も含め3個体のみの破片で、いずれも東海系早期末の土器片である。

2) 中期末～後期（第10図5～9）

1号墳石室下部と同じ高さに縄文時代中期末から後期と考えられる土器片を出土する層を確認した。

10図－5は浅い沈線を施すものであるが、小破片のため具体的な時期は不明である。他に無文の土器片が若干あり、いずれも中期末もしくは後期と考えられるものである。土器の他に同層から石器（10図6～9）が出土しており、遺構の存在は認められず丘陵傾斜地における包含層と考えられ、近くに何らかの遺構の存在は予想される。

（小林正春）



第10図 縄文時代遺物 ($\frac{1}{3}$)

ま と め

塚穴1号墳については、古くよりその存在が知られ、上久堅地区における古墳時代の様相の一端を示すものであった。しかし、出土遺物の伝承もなく、具体的な内容の形状を除き一切不明であった。

しかし古墳の存在は、一つの地域が当時の時代相を如実に受け入れたことを示し、地域及びその一族の文化的程度を知る大きな要素といえる。

そうした中で今回の調査により、石室の全体形をはじめ古墳全体規模更には出土遺物から7世紀前半という具体的な年代を知る材料が得られたことは大きな成果であった。

また、1号墳に連続して築造されたと考えられる塚穴2号墳の新発見は両古墳が位置するこの観音丘陵周辺が古墳時代における奥津城として重要な位置にあったことを示すといえる。

本古墳調査に先行して行なわれた隣接する北田遺跡の発掘調査により発見された古墳時代の集落址をはじめ周囲に存在するであろういくつかの集落に関連する一族の生産基盤・経済的勢力のありかたと考究することにより、当上久堅地区の歴史的あり様が浮ぶものといえる。

古墳の存在は、当然のことながらそれを築造し得た基盤となる集落あるいは一族の存在したことを示し、地域史を研究するためにはそれらの全体像を明らかにする必要があるといえる。

今回の本古墳の調査が、その地域史研究に果たす役割は多大であることはいうまでもなく、今後に大きな示唆を与えたとともに更に広い視野に立っての古墳時代研究上でも、その築造状況等大きな意味を持つものであった。

(小林正春)



1号古墳調査後の状況



1号古墳調査前の状況

图版 2



1号古墳石室内部



左側壁



右側壁



石室入口部

図版 4



石室入口部



同上



前庭部遺物出土状況



前庭部全景

図版 6



外護石積及び墳丘



同上



外護石積及び墳丘



入口部外護石積

図版 8



外護石積



外護石積(上方より)



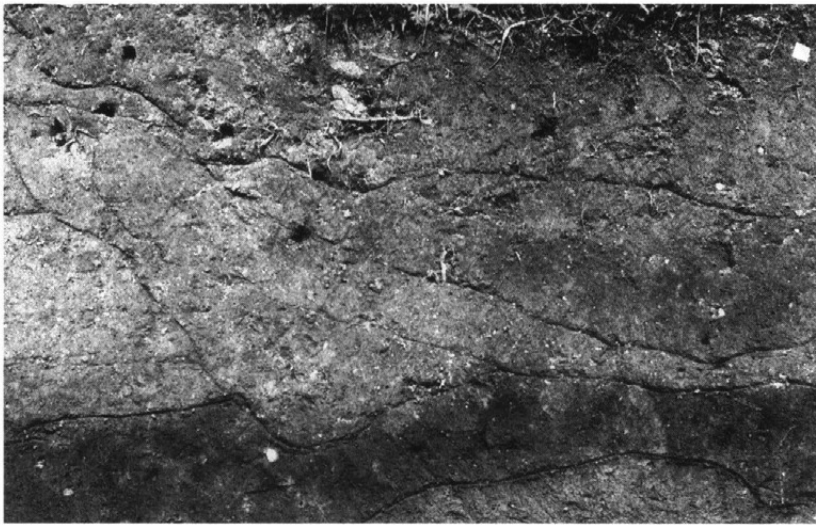
墳丘及び西側周溝



西側周溝



東側墳丘断面



東側墳丘裾部断面(周溝)



墳丘下部土層状況



鉄鏃出土状況



須恵器高坏出土状況



須恵器坏出土状況

図版12



1号及び2号古墳



2号古墳石室内埋土状況



2号古墳石室全景



2号古墳奥壁

図版14



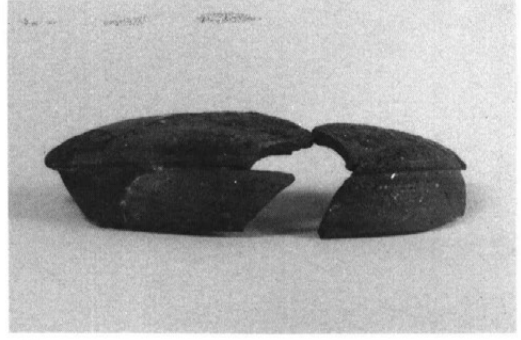
2号古墳左側壁



2号古墳右側壁



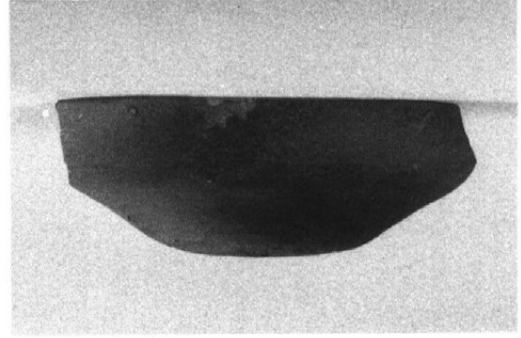
蓋



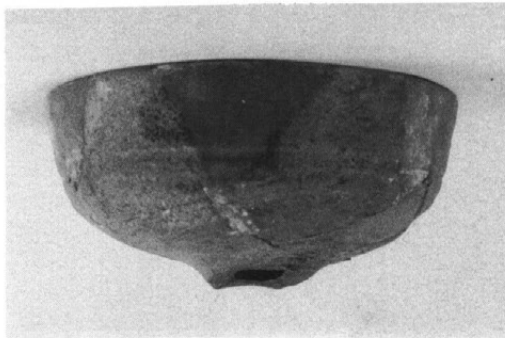
蓋



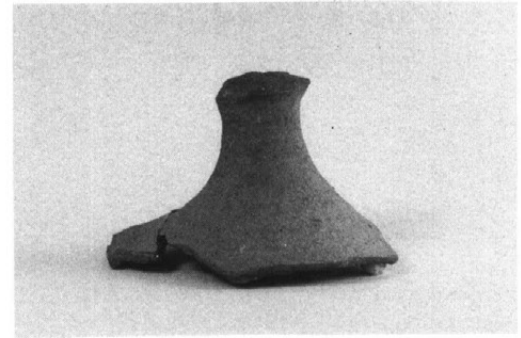
环



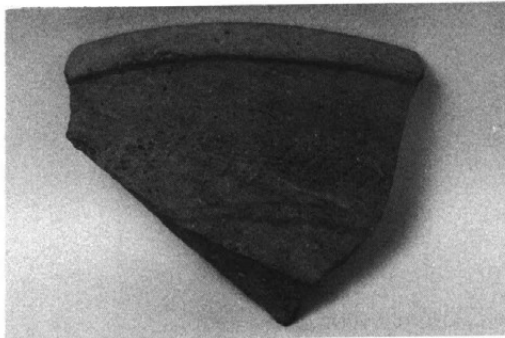
环



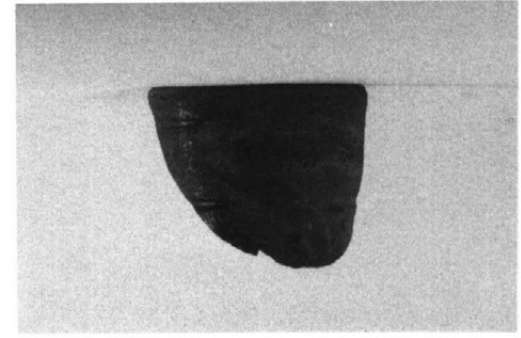
高环



高环

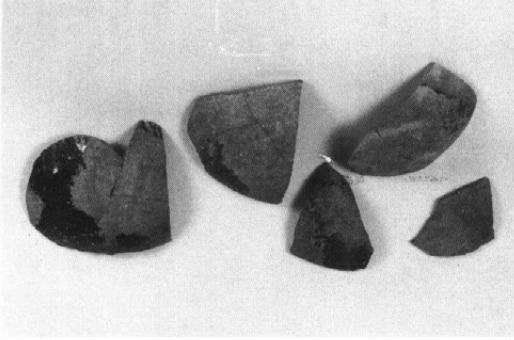


甕

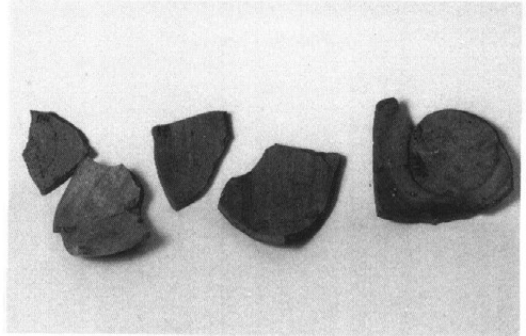


提瓶

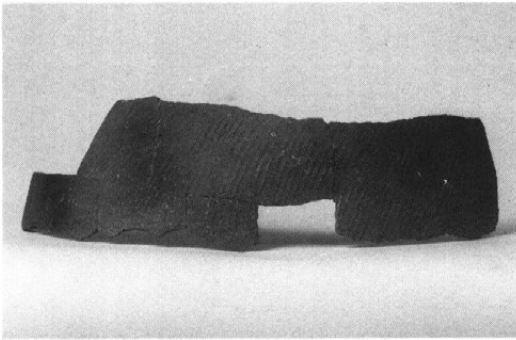
図版16



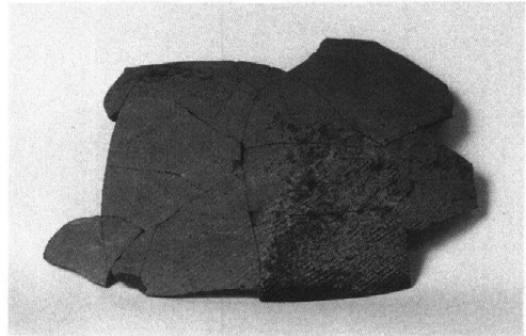
提瓶



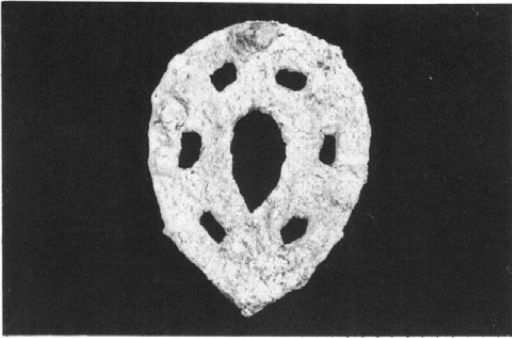
同裏面



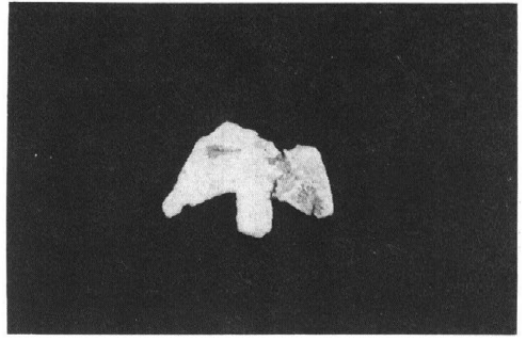
甕



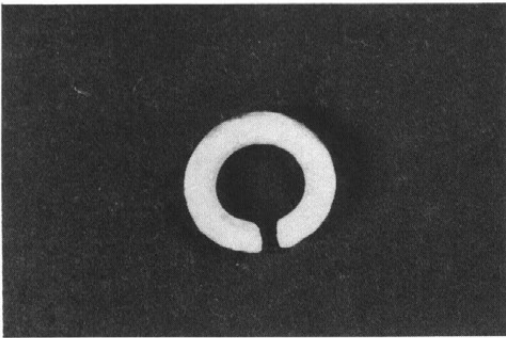
甕



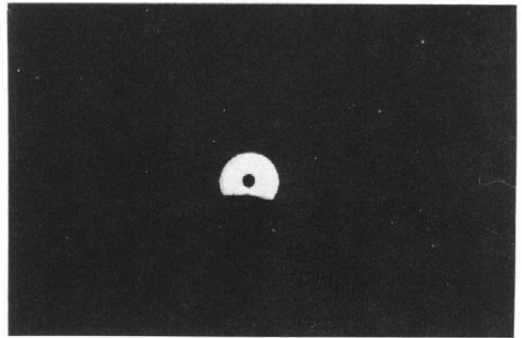
鐔



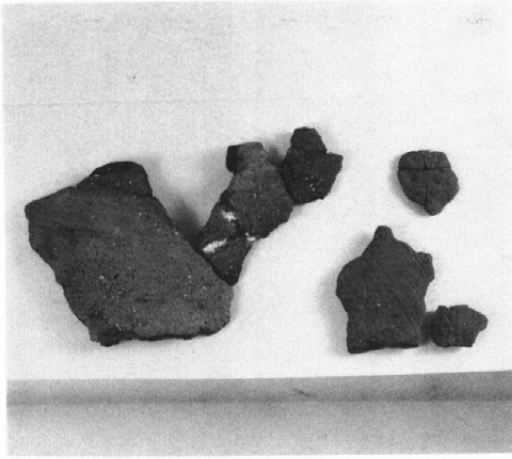
鉄鏃



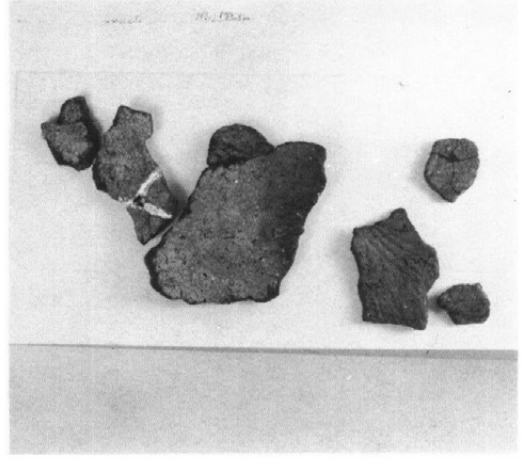
1号古墳出土遺物 金環



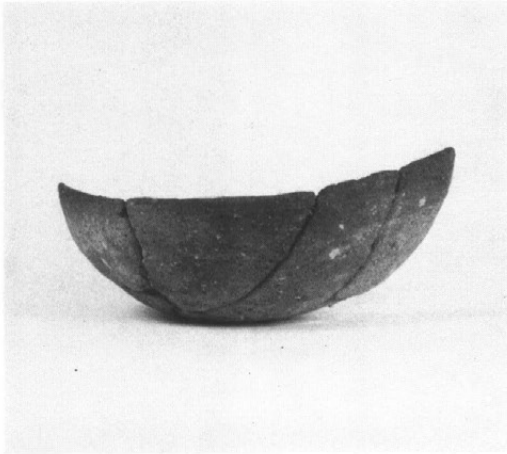
白玉



縄文時代早期土器



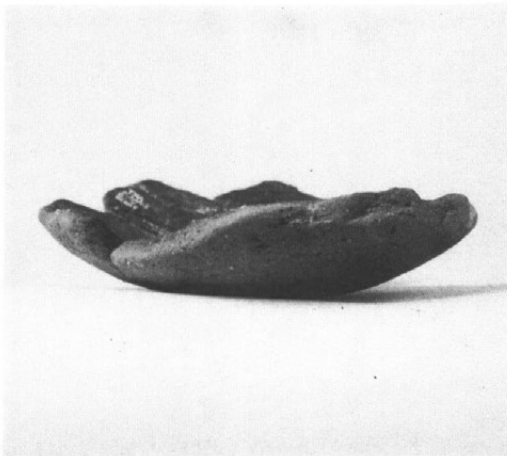
同裏面



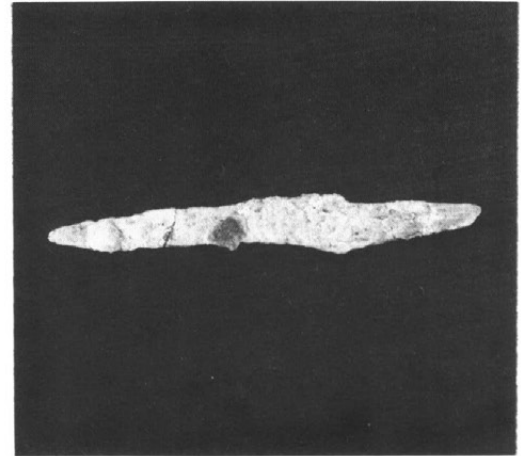
土師器坏



土師器坏



土師器坏



刀子

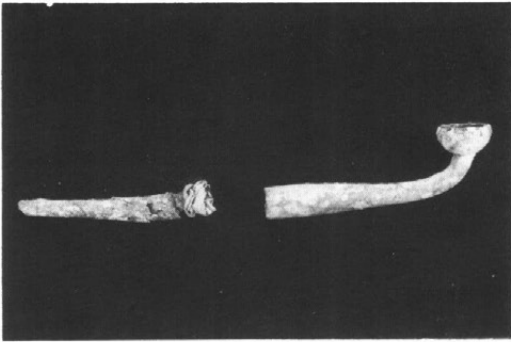
図版18



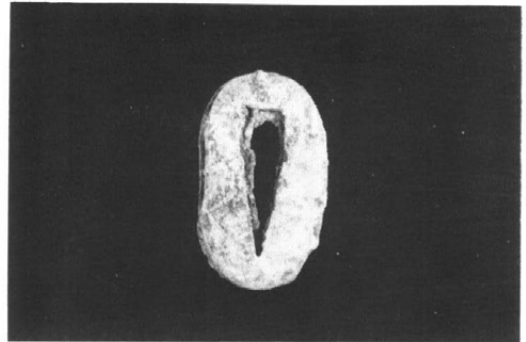
釘



不明鉄製品



キセル



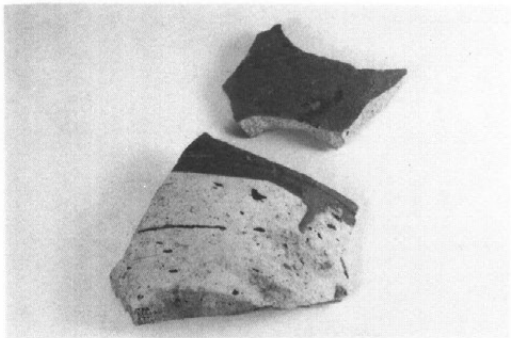
切刃



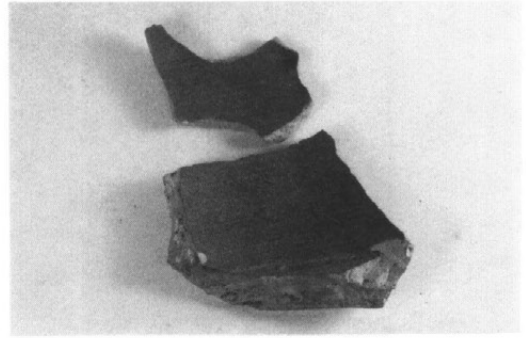
すり鉢



同左裏面



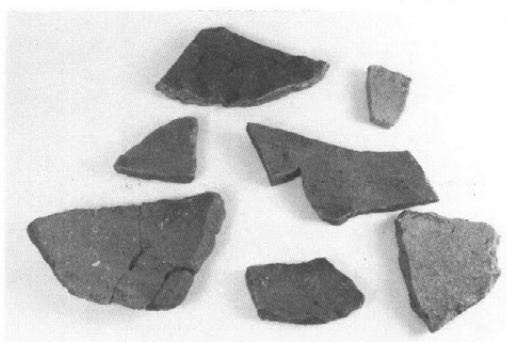
1号古墳出土中近世遺物 甕



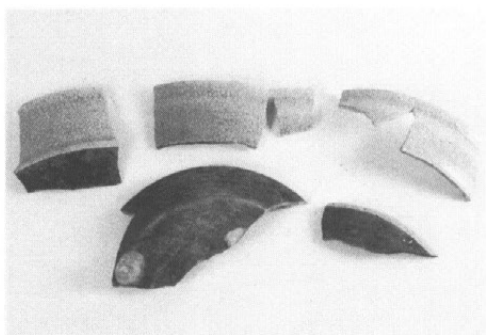
同左裏面



常滑焼甕



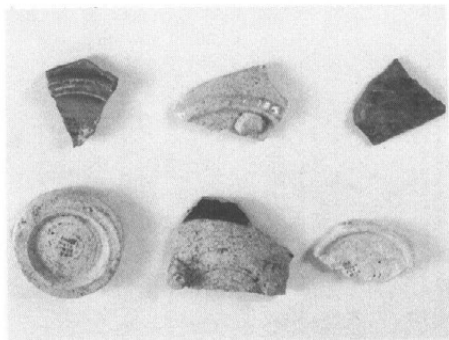
同左裏面



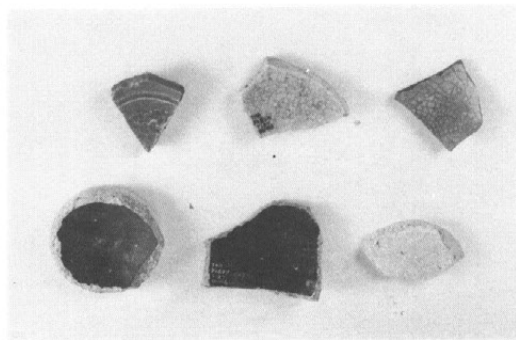
香炉



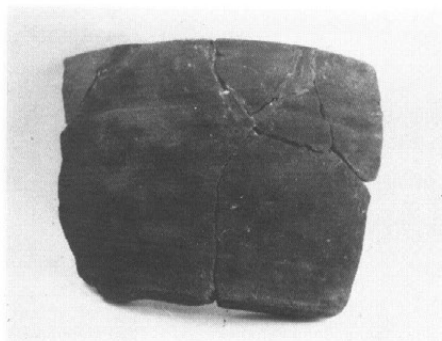
同左裏面



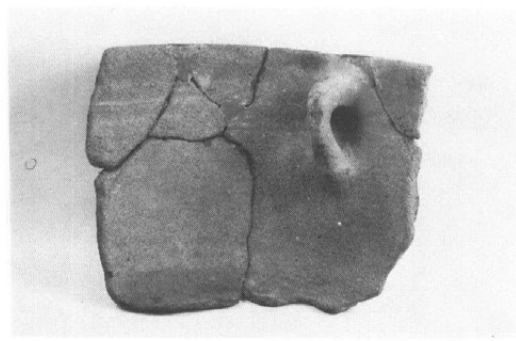
各種陶磁器



同左裏面



1号古墳出土中近世遺物 内耳鍋



同左裏面



現道舗装除去

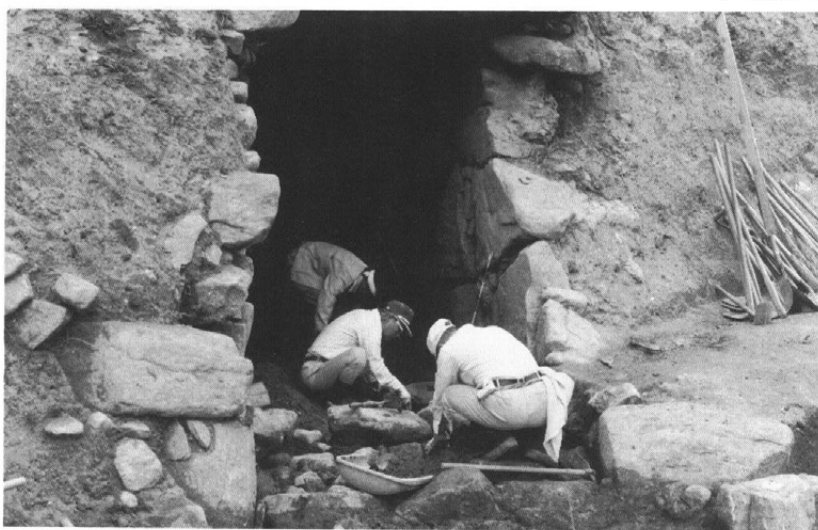


断面検出



石室内排土

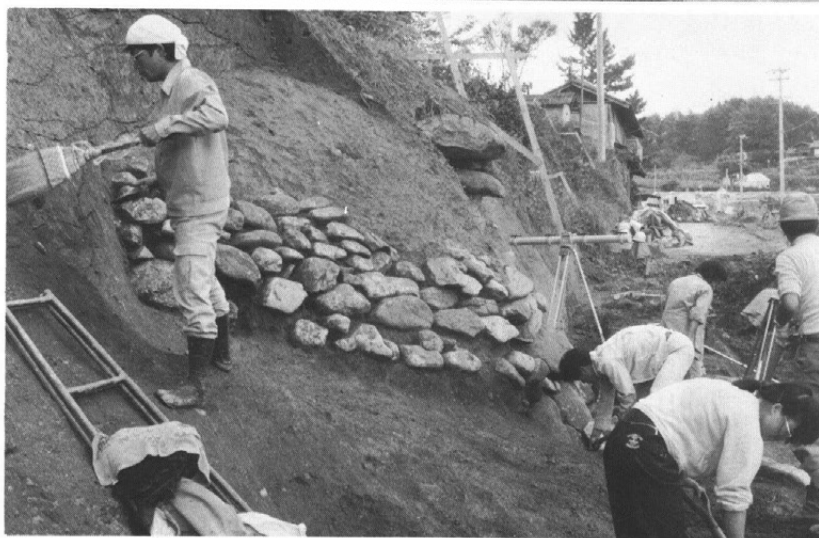
石室内精査



前庭部調査

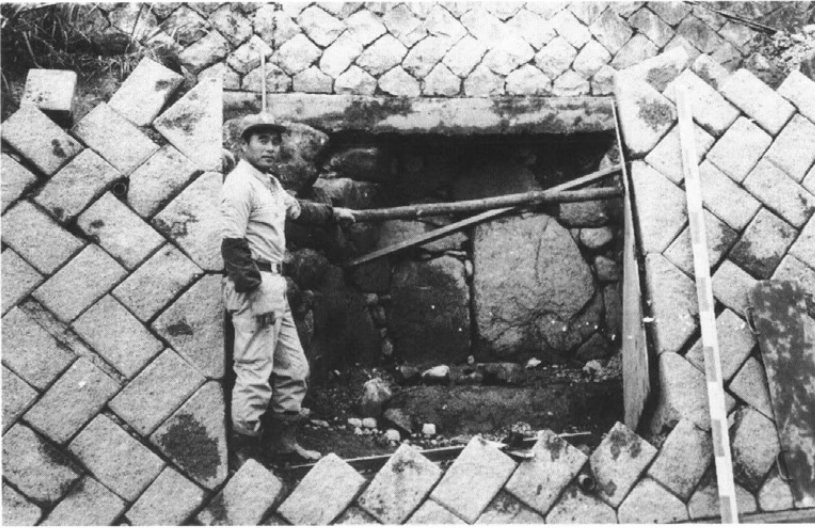


墳丘清掃





2号墳調査



2号墳前面石楼



見学会

塚穴1号・2号古墳

一般県道手塚原米川飯田線改良工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

編集・発行

飯田市教育委員会

長野県飯田市大久保町2534番地

